



SAS神戸 震災2周年フォーラム報告書

SAS神戸
SAS神戸震災2周年フォーラム組織委員会

S A S神戸震災2周年フォーラム開催趣旨

震災直後から、被災地神戸でS A Sの全国大会を開催しようというお話がありました。しかしながら、S A S神戸のメンバー自身が被災し、あるいは通常の2倍、3倍という多忙な業務の状況の中で、なかなかそのような余力がありませんでした。

2年を経過し、ようやく2日間にわたり、全国のS A Sの皆さんをお招きして、ここにフォーラムを開催することができることになりました。

震災は、都市のハード施設、社会システム、産業、そして人々の心に大きな影響を与え、そのひろがりや極めて大きなものであり、まだ、完全に回復したと考えることはできません。

今回のフォーラムでは、震災が我々に与えた課題の中から、S A Sのメンバーの活動領域に関連するテーマを選びました。個々のテーマについては短時間の議論となりますが、できるだけ具体性をもたせようと考えました。

本フォーラムでは、2年を経過した被災地の一部を見ていただき、S A S神戸のメンバーが何を考え、どのように行動したかの一部をお伝えし、さらにS A S神戸以外の神戸の現場で活動されている方を4人お招きして、皆様と議論していただきました。

そして、S A Sに何ができるか、この課題を被災地に対してだけではなく、それぞれの全国の活動の場所でどう解決していくかを考え、議論していただきました。

また、この集まりを、これから何らかの活動をしていく始まりにしたいと考えております。

本報告書を作成するにあたり、神戸市の関係者の皆様、震災以後様々な分野でご活躍されている皆様のご協力をいただくことができました。

さらに、(財)関西エネルギー・リサイクル科学研究振興財団、阪神・淡路コミュニティ基金から研究助成をいただきました。

ここに関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。



平成9年2月8日

S A S神戸一同

00097082028

目次

■SAS神戸が見た阪神・淡路大震災

『SAS神戸が見た阪神・淡路大震災』ヒヤリングより SAS東京 竹川 征次	6
法律家の知られざる震災対応	SAS神戸 大塚 明 11
地震後の長田の商店街と再開発の問題点	SAS神戸 友久 和幸 13
阪神大震災と神戸インナーシティ問題	SAS神戸 日野 孝雄 15
資料	18

■復興の現場からの報告

産業復興の現状	神戸市産業振興局商工課 課長 町本 欣信 23
こころと身体のケア	宮崎クリニック院長 宮崎 隆吉 26
新たな町づくり	神戸市長田区まちづくり推進課長 谷口 時寛 28
ボランティアとNPO	コミュニティ・サポートセンター神戸代表 中村 順子 30

■アンケートの集計結果 35

■フィールドワーク

[阪神間は今] フィールドワークより	SAS神戸 上谷 重男 47
--------------------------	----------------------

■資料

SAS神戸 震災2周年フォーラムプログラム	57
参加者名簿	58
SAS神戸「神戸大震災の記録」プロジェクト語り部通信	60

SAS 神戸が見た阪神・淡路大震災

S A S神戸が見た阪神・淡路大震災

大震災直後、S A S神戸のメンバーは被害の程度差はあったものの、各自それぞれの立場での復旧活動や支援活動に極めて多忙な毎日であった。その中でお互いの安否確認が、不便な通信手段の中で漸次行われ、取り敢えず一息つくまでの1ヶ月、個人的に差はあっても、精神的にはいわゆるハイな状態が続いたのではないだろうか。交通網がまだ充分回復していない中であったが、取り敢えず顔を合わせようとなったのが、震災から1ヶ月半経過した3月4日であった。

この中でこの震災体験をもとに、S A S神戸として何が出来ると言った論議も繰り返されたが、多忙なメンバーでありまた活動分野も多種多様であり、焦点が絞り込めないままの状態であった。

その時に、S A S東京の竹川征次さんから、さらに詳しく面談をしてこの震災を通じてなにかお役に立ちたいとのお話があり、それから10回近く神戸に来訪、その後多くの皆さんのご支援のもと、大変なご苦勞をされて報告書および要約版としての「語り部通信」にお纏めいただいた訳である。

この事は、本来S A S神戸が直接やらなければならない事柄であるが、他面客観的に、さらに冷静に捕らえるとともに、神戸の外からこの震災を把握していただき、S A Sと言う絆の中でお互いにこの震災を認識する良い機会となったのではないかと思う。

極めて不便な中、幾度も足を運んでいただいた竹川さん、このプロジェクトをご支援いただいた皆さんに感謝申し上げるとともに、今あらためてこの記録を読むと震災直後の生々しい情景が思い出されるとともに、この記録が役に立つような事態の発生が、今後いずれの都市においても無い事を切に念ずるものである。

震災2周年フォーラムで、シーパル須磨における竹川さんのご報告よりその要旨を纏めさせていただいた。

「SAS神戸が見た阪神・淡路大震災」ヒヤリングより

SAS東京

竹川 征次氏

震災直後から10回近く訪問してヒヤリングをしている間に感じた事を折り込んで、それぞれを大きく3つに分けて報告したい。

- (1) 震災直後初めて神戸を訪れた時の印象。
- (2) 神戸訪問と面談等で特に印象に残った事柄。
- (3) 震災から2年たった今、何をどう感じているか。

(1) 震災直後初めて神戸を訪れた時の印象

震災当日、神奈川県庁に赴くべく電車の中や雑踏の中で、何か大変な事がおきているらしい雰囲気を感じられた。県庁に到着すると、職員が一斉にTVに注目している。聞くと阪神で大変な事が起きているとのことで、県庁でも正確な情報が入らず、TVが唯一の情報源であった。

それから1ヶ月余り、どうしても行かなくてはという気持ちになった。その理由は(1)自分の娘が貯金をはたいて被災地に送るのだという。不断あまりそのような事に関心を示さない子供までがそのような行動に出るのは一体何があるのだろう。(2)マスコミが様々な報道を流す、一言でいうと映画を見ているような情景で、やがて一つの事柄として終わってしまいそうだ。このままでは済まされない事態である、現地の中で考えないと大変な間違いをしてしまうのではないかとといった不安が頭をもたげた。さらに自分自身がなにか役に立とうと考えた。東京のシンクタンクでも、国政に携わる面から支援策を検討しかけている時でもあり、その両面から今回の動機となった。

被災地神戸で街の中を歩いてみると、不安定な心理状態になる。平らであるべき都市の道路がうねっている、非日常を体で感じる。焼け跡の真っ黒な状態、その中に消息を訪ねる張り紙、だれだれがここに眠るといった標識、毎日花を手向ける人が来る話など、頭の中で理屈で客観性を作り出すのがむずかしい状況であった。

初めて神戸に来た時は、丁度SAS神戸で震災後初めての会合が開かれていた。SAS神戸のメンバーも1ヶ月半が経過し、やっと自分の周りで何が起きたか見つめて、理性的に受け止められる状態になっていた。さらに自分

の思っている事、感じている事をお互いに発表しながら、皆がどう思っているか確認し、共有しようとして議論が非常に深い所まで進んでいった。単なる状況報告でなく、報告の中で自分がどう感じて、どう対処したかと言った事が印象的であり、夫婦関係とは、親子関係とは、地域社会とは、仕事とはと言った問題を、自分の原点に立って発言されていた。

このような話を聞きながら、この貴重な体験はぜひ残すべきだ、自分が知らなければならない事は沢山ある、ここに来るまで自分の思ってきた事をすべて捨てようと思った。

この計り知れない大変な環境の中での体験は独特のものである。直接、被災した人はもっと大変な状態であり、その心理状態はどうであったらうか。

この大変な経験を共有し、その中で救助、救援がお互いに当然の事として行われた。ここでの人の心は独特なものである。それらの行動の根っこにあるものは何であろうか。これからは、そのような根っこを掴んだ政策こそ必要なのではないか。この様な事を考える中で、SAS神戸の体験を何とか記録しようとしたわけである。

(2) 神戸訪問と面談等で特に印象に残った事柄など。

この様な経緯で、神戸を10数回訪問する中で聞き取った記録は、膨大で多岐にわたるものであった。これを支援者のご協力をえてテーマ別に「語り部通信」と言う形に纏めた。それを中心に報告することとする。

◎語り部通信 その① その時、必要な道具

震災直後、まさかこの様な事態が起こるとは予想もしない時に、想像を超えた特異なせつば詰まった状況が目の前で次から次に起きている。家の下敷きになった人を助け出す、その時、何が必要なのか、単にバール、のこぎり、ジャッキがあれば良いといった単純なものでない。助けを求める人があれば、周りの人々が道具を持ちよって救助する。個人の偶然持っていた道具がこの事態に役に立つ。

日頃のささやかなコミュニケーションが機転となって、老人を救いだす事が出来た話などは、日頃からその社会がどう形成されているか知っておく事の大切さが実感出来るものである。またこのようなせつば詰まった状況の中で、日常生活を維持する事がいかに大変であるかを理解してほしい事である。

◎語り部通信 その② その時、必要な情報

生死の境を潜り抜けた生々しい状況の中で、人間同士の生活レベルでの身近なコミュニケーションが大切である。小さな公園が役に立ったが、ここに集まった被災した人々が、不安のなかで顔と顔を合わせお互いの安否を確かめ合った。無線機等の施設機器はこれからの防災対策の智恵として用意する事であるが、今ここでこの様な事態の中では、これらの機器は殆ど役に立つとは思われない。

自分の職場にかけつける、その途中に目前で救助などしなければならない事がある場合、初期動作としてどちらを選択するか、智恵と価値観と使命感、その中で個人の資質と社会の資質が問われようとしている。

◎語り部通信 その③ 「救出活動の記録」

神戸市消防局の広報誌「雪」には、救出活動の生々しい報告が寄せられている。救援の第一線にある消防士自身や家族も被災し、職場にかけつけるだけでやっとである。その上混乱の中で、指令よりまず先に動かなければならない異状事態がつづく。

各地から駆けつけた消防車が、連係を取って異なる市町村の消防車とホースが繋がりやっと機能する事態。崩れかけた建物に決死隊の入る判断には、消防士も一般市民も大差ない状況。クレーン車や消防車の燃料を民間企業がどんどん提供してくれる事。わずかな差で生と死が分かれる極限の状態がいたるところであった。

◎語り部通信 その④ 「被災地生活の実態」

日頃社会福祉の仕事に当たっている人の話を聞くと、かつての水害の時を想定して、大規模災害発生事に10～15人の死者を前提として近くの学校の体育館に準備をした。午前中数人の遺体でもびっくりしたが、夕方になるにつれて大変な数の遺体が運び込まれた、2階に運び上げるにしても毛布でくるまれているので何とか搬送したが、子供の遺体には耐えられなかったとの事であった。このような事態に何の用意も、マニュアルも、社会的感覚もないまま2～3ヶ月は目の前の処理に精いっぱいであった。

避難所には情報や救援物資がある程度集まったが、何とか自宅で頑張った人や避難所までも行けない人は、情報や救援物資の支援が受けられない事態となった。

◎語り部通信 その⑤ 「ボランティアについて」

今回多くのボランティアが活躍したが大きく分けて2つの面で考えてみる必要がある。

(1) 今回の震災後も3日目、3週間目、30日目、3ヶ月目に事態が変化している、その時々でボランティアの内容も変化し、それにいかにタイムリーに対応するか。

(2) ボランティア活動を地域社会、行政、国がどう見るか。ボランティアは基本的には個人の価値観、信念で成り立つものである。それを制度化するのはいかなものか。

◎語り部通信 その⑥ 今後の神戸のあり方

(注) 語り部通信の全文を別途掲載いたします。

(3) 震災から2年たった今、何をどう感じているか。

今回の話の中で、都市をどう見るかが重要であると思う。都市を作ってきたものに二つの面がある。その一つめは物理的な、いわゆるハードとして作り上げた都市、規模拡大、機能、効率を中心とした都市論であり、二つめはそれに対応する責任と言う部分、言い換えれば都市の利便性を享受する反面身につけておかねばならない部分が大切である。メンテナンスや管理（守ることと支えること）をしないとといった感覚が必要である。

都市をあたかも魔法使いの様に急速に復興させようとする事は、ある面では望ましい事である、しかしそのために高速道路の耐震性をどうするか、経済復興を早める為の資金をどうするかといった議論はどうしても先鋭化する。しかしそれは論議全体の半分であり、残り半分はこれと同じく論議の必要な部分がある。これは人間の繋がりの中にある社会、癒される社会としての都市論である。機能、効率、便利さに対応した都市の中である意味での心の豊かさの視点の必要性を感じた。

専門的な面を出さないと都市づくりにならないと言う議論もあるが、今回の活動の中で、町の中のごく普通のおばさんや、災害に打ちのめされた人々の中に大切なものがあると感じた。もっと基礎的な部分での人間としてのありかた、ある程度漠然としていても私はこんな生活をしてみたい、こんな人間関係が大切なんだといった事への声を大きくする必要があると感じた。

長田の靴工場でも、零細工場が震災でつぶれて大変なんだと言った事より、この様な事態になって、はじめて、ここには大変な価値があったことが分かった。この地域の生産力は非常に大きいものがあり、さらにここで働く高齢者の生きがい、やりがいを作り出す場であり、またコミュニケーションの場でもあった。いまこれをそれぞれもとのように取り戻す事は大変な事である。

今、人間関係で最も根本的なものは、「今日はこんな良い事があったんだよ。」とか言ったような事が話し合えて、お互いに共感の持てる関係である。社会が崩れるとは、そのような人間関係そのものが崩れると言う事に繋がるものである。

阪神・淡路大震災で6千人以上の人々が亡くなった、この人々をこの神戸がどうして鎮魂しようとしているのか。潰れてしまったもの、なくなってしまったものを取り戻す事は、どのようにしても不可能である。いまやっとそのことが理解出来るような状態になったのではないか。

自分がどれだけ生きるか、自分の仕事としてどうやるべきか、地域社会に、また子供や孫になにをつないでやるべきかと言う形でしか応える道はない。いろいろと考えられるが、最後には、やはり魂の尊厳をどのようにして後世につなぐ事が出来るか、という事が大切な事ではなかろうか。

以上

法律家の知られざる震災対応

S A S 神戸 大塚 明（弁護士）

1. 弁護士の被災状況

神戸弁護士会（兵庫県内）会員 約 350 名 内 神戸市内は約 240 名

このうち事務所全壊 41 名 自宅全壊（焼）26 名 半壊以下は集計不可能
残った事務所もほとんど内部の備品什器や書籍記録の倒壊散乱により使用不能
のため、数週間の間は、資料・先例なしの法律相談を強いられ、前線戦闘中の
衛生兵なみの対応を余儀なくされた。

弁護士会館は 1 月 17 日～6 月 10 日の間、近隣被災者の避難所として開放され
常時 600 人以上が 24 時間避難していた。その間の弁護士会は、通常業務はほ
とんどできず、会員の安否確認と裁判所、検察庁等との連絡調整、自治体等と
の法律相談の連絡、等の最低限の業務を行いながら、被災者のために 24 時間
（宿直設備なし）会館を開放しなければならなかった。

2. 法律相談体制

地震緊急電話相談 神戸市からの要請により、臨時の電話回線を設置して、
1 月 26 日から 2 月末まで合計 4,782 件の電話相談をうけ
つけた。1 日 160～190 件。受信状態から考えて、この
十数倍の架電があったと思われる。

市役所等へ特別派遣 1,488 名派遣(11 月末迄)

既設相談所への増員 375 名派遣（ // ）

ボランティア臨時法律相談 各所で随時

各地からの応援 神戸だけではとうてい対応しきれないため、全国の弁護
士会から交通費・日当・宿泊手配なし、で受入れた。

3. 法律扶助

低所得者への訴訟援助（弁護士紹介と費用立替）で、財団法人法律扶助協会（日
弁連の外郭団体）が法務省補助金（2 億円）と弁護士会の運営負担（自治体の
協力を含む）で行っているが、先進各国にくらべて大幅な立ち遅れが指摘され
ている。（例年の事業規模は、訴訟援助（補助金と立て替え償還金）約 10 億
円で、例年年度末になると予算不足により事業に支障をきたす。）

今回、とりあえず震災特別枠として 500 件分 8000 万円を自主決定した。とこ
ろが（例年はいくら予算増額を頼んでも不可能であるのに）補正予算で約 3 億

3500 万円を追加された。このこと自体は結構なことであるが、問題は、運営費・スタッフの不足、予算の一過性（当初は平成9年打切？）、受任弁護士の過重負担（低額報酬）等により、事業執行（予算消化）に不安があった。結果的には、なんとか事業執行し、継続予算もとりあえず確保された。

4. 裁判所の震災対応

関東大震災の際の調停大幅増加に鑑みて、裁判官・書記官の増員、調停委員の増員（弁護士・不動産鑑定士・建築士ほか）、調停室の増設、等を実施した。しかし、結果的には関東大震災ほどのことはなかった。その原因としては、震災直後からの無料法律相談の大幅な実施等によるパニック防止が寄与したのではないかといわれているが、正確な分析はできていない。

5. 罹災都市借地借家臨時処理法の適用

適用の可否については議論があったが、改正のゆとりなく、ほかに方法がなかった。問題点と改正論は、今後に残されている。

解説書が一切なかったため、近畿弁護士会連合会で臨時の解説書を作成し、会員に配布。これが当座の法律相談用資料となり、後に商事法務研究会から出版された。

6. 総 括

誰もが「災害時には医師と消防」で「弁護士ではない」と思っていたが…。

たしかに当初の一週間は救急と医療が最優先された。しかし、その後はメンタル・ケアとソーシャル・ケアが必要とされ、大規模災害時の弁護士の必要性が再認識された。

災害時の法律相談は、通常のコンサルタント性に加えて、専門家の援助を受けることができるという安心感を与えるカウンセリング性が大幅にクローズアップされたといえる。これが震災直後のパニック防止に役立ったと考えられる。その意味で、法律相談は精神・社会安定への寄与が大きかったといえようか。将来もし関東大震災が起こったら？ 東京圏では都心の弁護士会事務局が連絡不能になることを考えて、各拠点で独自に活動することを考えている。

地震後の長田の商店街と再開発の問題点

S A S 神戸

友久 和幸

地震前、5～6年の間に、地域の有志が集まって街づくり協議会を結成し、街のあり方について机上での議論を進めていました。下地があったことにより、地震後、4～5ヶ月でメンバーが集まり、街づくりへ進み始めました。

従来、街づくりは長い年月をかけて（欧州では何百年も）住民がコツコツと創り上げるものでしょうが、突然の地震により、早くやらなければと、全員が悲壮感の中にも、大いなる希望を持ってやろうとしていました。

市の対応の早かったのは、評価できます。

震災後、2年がすぎたの長田の街の持っている特性（あるいは問題点）を以下に列挙していきます。

{長田の街}

良い点

- ・団結力が比較的よい

悪い点

- ・街の力がどん底
- ・住民の財力が弱い
- ・人口密度が高い
- ・木造賃貸住宅が多い
- ・家が密集している

以上の点から見ても、団結力のみが良くて、街はどん底の状態、住民は何とかしたい、何とかしたいという思いでいっぱいでした。

そこに大地震が起こったわけです。

渡りに舟とばかり、街は大いに活気づくという希望を持って、再開発が進みはじめましたが、いろいろ問題点が出てきました。

私達の街は、第二種再開発ということで、行政主導の再開発で、最終的には強制執行もできるというものだそうです。

さて、私達の商店街は、70店舗が焼失しました。（全体の7割）商店街を再生するには、再開発がなくてはならない手法ではある訳ですが、実際に進んでいる過程で問題点は沢山ありました。

(A) 古い商店街で、大地主がいて、土地も店も他人のもので、店子の方が多い。

(B) 土地を借りていて、家を持っている。

(C) 家も土地も自分で持っている。

商店街の構成は、A、Bの人が7割で、Cは3割です。A、Bの人も店が残っているのなら良いのですが、焼失してしまい、Aの人は営業権のみ、Bの人は借地権のみという状態におかれました。

Cの人は土地を市の方へ売却し、再建も可能かと思いますが、A、Bの人は何の財産もなくなった訳で、再建は大変むずかしい状況と思われます。

更には商店主の高齢化、再開発に年月がかかりすぎるという三重のパンチで、今の状態だとともに再建できるのは2～3割程度です。

今後、高度化資金の借入れなどを検討し、震災前のように地域の中心となる商店街に戻れるよう努力はしていますが、道のりは大変長く、つらいものになりそうです。

以上

阪神大震災と神戸インナーシティ問題

神戸市長田区の被害の特徴と要因

S A S 神戸 日野 孝雄

1、高齢者へ集中した犠牲

今回の震災では犠牲者の過半数が60歳以上の高齢者に集中した。大都市の直下型自身では高齢者に被害が集中する可能性が高い。

長田区では震災前の高齢化率（65歳以上人口）が16、4%であったが、震災における犠牲者では死亡者数728名の内、60歳以上の死亡者数は468名にもなり、実に64、3%を占めている。

2、何故高齢者に犠牲者が集中したのか

①神戸の都心部（長田区、兵庫区、中央区、灘区）に高齢者が多く居住し、近郊のニュータウンに若年層が居住するというドーナツ化現象が生じ、インナーシティといわれる都心部の高齢化が著しく進んでいたこと。都心の再整備よりも、海上埋め立てや近郊にニュータウンを建設し、多くの資源を投入して来た。東京、大阪等の大都市で全国的に見られる、都市政策上の結果でもあった。

②さらに都心部（長田区等）に生まれ、育ち、成長した子供達が、この地区で住居を構えず、近隣のニュータウンに、親と別居して新居を建設し、親は住み慣れた長田から離れず、老夫婦のみで生活しているケースが多かった。このため住宅に対する新規投資がなく古い住居はそのまま利用されてきた。

③老夫婦の住む住居は、戦前建てられたか、戦後すぐ建てられた老朽住宅が多かった。長田区の建築時期別住宅数は終戦前建築が19、2%、終戦から昭和35年まで18、8%、合計38、0%が老朽住宅であった。一方神戸市全体では昭和35年前建築は18、9%である。インナーシティ地区の兵庫区、灘区も同様の傾向にあり、この地区には老朽住宅がJR沿線に多く滞留していた。

④昭和30年からの経済成長で臨海部の造船、鉄鋼、電機、化学等の工業が発展し、多くの労働力を必要とした。そのため昭和40年の人口は長田区21万人、兵庫区20万人、灘区、中央区17万人と4区で全人口の62%を占めるに到り、こうした人口を吸収するため、狭いが安い文化住宅等が多く建設され、震災まで利用された。こうした住宅は地震に対する抵抗力はなく一挙に倒壊した。

3、神戸インナーシティ問題とは

昭和30年代の経済成長と人口の集中に対し、政府は工業等再配置計画で近畿大都市圏の工場の追い出しを行い、工業の再配置が促進された。川崎製鉄は千葉に主力工場を、三菱、川崎重工の大型造船部門は長崎と坂出に移転、神戸製鋼所は加古川に製鉄所を建設した。この結果労働力の分散が進み、都心部から多くの労働者が流出していった。こうして都心部の空洞化もたらされ、代わって労働者住宅である文化住宅に近隣から安い住宅を求めて、高齢者層である年金層やケミカルシューズ等の職を求めて低賃金層が流入してきた。

当初労働者の街として膨れ上がった地域は、工業の再配置計画で人口が流出し、工業流出に

対する新しい産業政策も打つ手がなく、工場の街は、高齢者の街となり、イメージはさらに悪くなり、本来そこで生まれた若年層の流出をもたらした。

こうした衰退の構造（図）が完成すると、地域は容易に立ちあがれなく。都市の最も弱い環として災害には耐えられなくなる。

こうした結果、阪神大震災は神戸市の弱点であったインナーシティ地区を直撃し、大きな被害をもたらしたと考える。インナーシティ地区の最も弱い所が、長田区、兵庫区であり、灘区、東灘区等ではJR線を中心にした阪神線と阪急線に囲まれたエリアに被害が集中している。

一時地質学者から、JR線沿線の被害の大きさから、地震の反射波がこの地域に集中し被害を大きくしたのではないかという研究が発表された。しかしインナーシティ問題という社会政策上の問題があったことに気付く人は少ない。都市計画学会が被災をランク分けした地図には、最も被害の大きいランクである「赤」がこうした地域を覆っている。

4、インナーシティ地区の再生は可能化か

東京では大田区、江東区、墨田区、葛飾区、江東区、台東区等の下町がこうした地域と言える。下町といわれ老人にとっては住みやすい地域が、震災時には要注意地域といえる。神戸、東京だけでなく全国の都市にはこうした地域を抱えており、こうした地域の、防災と救命の仕組みを盛り込んだコミュニティづくりが求められている。

こうしたインナーシティ地区は、路地があり、行き付けの八百屋、魚や、風呂屋、居酒屋があり、お互いにいたわり、助け合う環境が形成され老人には住みやすい街でもあった。

今こうした地域（長田区南部）には高層ビルが何本も建設され、被災者救済公営住宅に代わろうとしている。しかし再開発のためのハードは計画されたが、この地区を将来どのような街にするかというビジョンはない。今住宅に入れるか、商業床を確保できるかという差し迫った問題に被災者はとらわれ、被災者を中心とした街づくり協議会の意見をベースに街づくりを考えようとする行政の姿勢もあって、将来この地区をどのような街にするかという都市ビジョンについてはどこも手を付けようとしていない。

表1 長田区、兵庫区、中央区、灘区の人口減少

	昭和40年	平成5年	平成7年
長田区	21、4万人	13、2万人	9、7万人
兵庫区	20、7万	12、0万	10、4万
中央区	17、2万	11、3万	10、4万
灘区	16、9万	12、6万	9、7万
神戸市	121、7万	150、9万	142、4万

表2 基幹5大企業正規従業員数の減少（有価証券）

昭和45年	昭和60年	平成5年
41546人	23808人	17464人

川崎重工業、三菱重工業、三菱電機、神戸製鋼所、川崎製鉄所の合計

表3 建築時期別住宅数

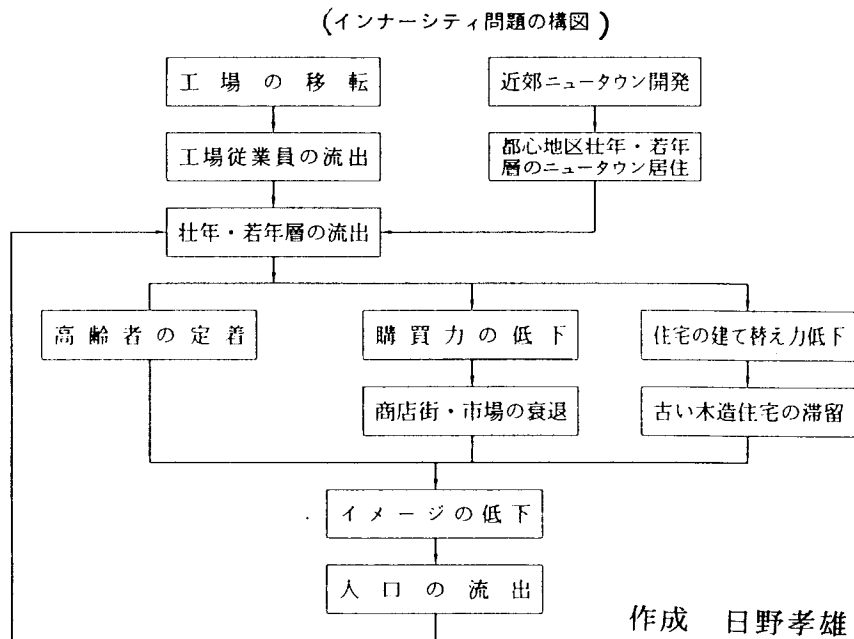
	終戦前	終戦からS35年以前	S36年以降
長田区	19、2%	18、8%	62、0%
兵庫区	10、9	21、2	67、9
中央区	2、7	18、2	79、1
灘区	10、8	18、3	70、9
神戸市	6、9	12、0	81、1

表4 住区基幹公園面積 (H4年)

長田区	1、43㎡	須磨区	3、61㎡
兵庫区	2、55	垂水区	2、47
中央区	3、69	北区	4、50
灘区	1、94	西区	6、16
東灘区	2、18		

(長田区では公園面積の少なさが類焼の原因ともなった)

図1 都心地区衰退の構造



(資料) 阪神・淡路大震災と復興状況

- 1、犠牲者数 6443人(内震災以降の関連死875人)
- 内神戸市 4567人(670人)
- 西宮市 1134人(128人)
- 宝塚市 118人(35人)
- 尼崎市 48人(17人)
- 伊丹市 23人(12人)
- 大阪府 30人(4人)、川西市4人(3人)、明石市10人(2人)
- 淡路島59人(4人)、加古川市2人、三木市1人、京都府1人

2、死因割合

圧死、窒息死	66、2%	焼死	8、6%
出血・ショック死	2、5%	頭部、内蔵損傷	2、5%
その他	20、5%		

3、性別年齢死亡率(年齢不明10人神戸新聞調)

男性2738人

内10代以下9、7%	30代以下13、2%	50代以下22、3%
70代以下37、5%	80代以上17、3%	

女性3696人

内10代以下8、1%	30代以下10、3%	50代以下20、4%
70代以下40、0%	80代以上21、1%	

4、家屋倒壊(神戸市)

全壊	6万1800戸	半壊	4万7545戸
内長田区	1万4662戸	内長田区	7770戸

5、家屋火災

全焼	6965戸	半焼	80戸
内長田区	4759戸	内長田区	13戸

6、住宅復興計画(神戸新聞調)

	仮設住宅世帯の希望居住地	災害公営住宅建設個数	大規模開発住宅供給個数
長田	3824世帯	2486戸	なし
兵庫	2953	1186	1700戸
須磨	1888	996	415
垂水	633	2391	1514
東灘	2719	1574	4100
灘	2658	2219	なし
中央区	2233	2307	なし
北	342	936	8698
西	647	1999	7922

7、数字で見る震災復興度（神戸新聞調、統計上97年1月現在では96年11月までしか統計が集計できていない）

①再建された建物数 45、9%（新築、仮設、96年10月）

②人口 神戸市 95年1月 152万400人

96年4月 141万5700人（減10万4700人）

同12月 142万400人

長田区のみ23ヵ月連続減少で3万8000人減

③神戸港バース復旧 57、6%（96年12月）

④神戸港輸出入額全国シェア（各年1月～11月平均）

輸出 94年 11、4% 95年 6、7% 96年 9、0%

輸入 同年 8、6% 同年 4、4% 同年 6、3%

⑤外国貿易船入港数とコンテナ取扱個数（各年1月～11月）

外国船 94年9813隻 95年6051隻 96年8103隻

コンテナ 94年235万6千個 95年117万1100個

96年189万4000個

⑥オフィス

貸室面積 94年8月1087千㎡ 96年8月95万4千㎡

⑦商店街・市場（市内6区東灘～須磨）

営業店舗数94年1万1651店 95年2月2713店 96年7月9168店

⑧高級飲食店数（中央区）

94年12月4124店 95年2月313店 96年10月3141店

⑨ケミカルシューズ（日本ケミカル工業組合各年1月～11月）

94年613億3700万円 95年128億4000万円

96年330億1100万円

⑩観光客数（1月～10月）

94年2130万人 95年700万人 96年1493万人（10月まで）

⑪百貨店販売額（1月～11月）

94年2202億円 95年1135億円 96年1610億円

⑫国際国内会議（1月～11月）

94年 624件 95年330件 96年583件

復興の現場からの報告

産業復興の現状

神戸市産業振興局商工課
課長 町本 欣信氏

(1) 震災直後

西神ニューウタウンから山麓バイパスを通り、トンネルを抜けて三宮へたどり着いた。ビルはいたところで倒れ、道路は波打ち、市役所旧庁舎は5階が完全につぶれ、地震のすごさに唖然とした。役所に入り「何をしたらよいか」ぼう然とした。

経済局は卸売市場を管轄し、①物資の調達、②業界の被害の調査をするのが先決と判断した。

まず物資の手配をする。ダイエー、生協に物資の調達要請をし、ダイエー、生協が物資の調達と供給に直ちに動き非常に助かった。

中央卸売市場から、生鮮野菜、果物を調達、トラックで避難所に配った。余震の中、高速道路の下を走るため、トラックの運転手は高速道路がいつ倒れるかわからないと怖がり嫌がった。

次はパンを大手パンメーカーから5万食～10万食分を調達し、1週間分を京都、名古屋からヘリコプターで運搬してもらい配る。1月18日～1月25日であった。

次は水、ビール会社から連絡があり、ビールのビンに水を入れ配り歩いた。しかしビールのビンは重くて、1回だけで中止した。

1月27日からは民生局がルールをつくり、食料の配給システムができた。食料等の配給の仕事は経済局から民生局へ移った。

(2) 企業の被害状況調査

自転車やバイクに乗り、被害状況を調べた。神戸の地場産業はケミカルシューズ、清酒、コーヒー、アパレル、洋菓子、洋家具等10業種ある。1月18日長田区のケミカルシューズの現場を見てただ茫然とした。あたり一面焼け野原の状態であった。

灘五郷には神戸市側で30の蔵元があるが古い木造蔵が全壊していた。鉄筋、鉄骨の蔵は残ったが、中はメチャクチャ、新酒が出荷直前であったため、4万リットルのタンクが全部壊れ、酒が流れっぱなしであった。

企業の復旧には、お金の手当て（緊急融資）、操業する場所の提供が必要となる。

緊急融資は1月25日に開始、4月26日までの100日間で国、県、市は1万件を処理した。90%は再建資金、運転資金の融資申込であり、合計7,000億円の融資を行った。

操業場所の提供は、賃貸建物で操業しているケミカルシューズ等を対象に、仮設住宅の工場版である仮設工場を提供した。土地を持っている経営者は担保能力があり、融資を受けられる。南駒栄（工場団地の計画予定地）、インナー第4工業団地、荻藻島、西神工業団地に仮設工場を作ることを1月21

日に決定した。

資金は、国へ相談したが、補助はだめだと言われた。神戸市は土地を提供し、国からは事業費総額の90%、県からは同様に5%の無利子融資を得て、合計80数億円の融資を受け、170戸の仮設工場を提供し、240数社が入居した。

仮設店舗では、5人以上でやる場合に建設費の一部補助を行った。

この頃、若いボランティアが神戸に続々入り、勇気づけられる。

(3) 産業復興計画策定作業

委員会を設立し、24～5人で作業に入った。3ヶ月かけて6月末に完成した。目標は10年の短期に設定した。産業のグローバル化の中で産業はこれまでも苦戦を強いられてきた。住宅・生活再建に比べ産業は先が見えない。

神戸の製造業は20%が自社技術を持つが、80%は全くの下請け企業である。大手企業は半年で回復基調に乗り、利益もあがりはじめた。しかし、中小の製造業は仕事があっても儲からない。単価を切り下げられて受注しているからである。

地場産業では、ケミカルと清酒が特に大きな被害を受けた。清酒は自助努力でかなりいけるが、ケミカルシューズ業界は大変しんどい。ケミカル業界1600社の内、400社がメーカー、あと1200社が全くの下請け企業であり、全体で1万5000人～2万人が働いている。これが壊滅的な被害を受けた。メーカーも90%は回復したが、50～60%弱の生産力に落ちている。

商業は市場・商店街がしんどい。住宅が倒壊し、周辺に人がいない。人口が減少し、消費が冷え込んでしまった。住宅の再建と同時にやらなければならない。

ホテル、旅館は9割が再開し、7割が稼動している。観光は高速道路の開通、ルミナリエで80%が回復した。ルミナリエは385万人の集客、300億円の経済効果があったとされる。経費は7億円かかったが成功した。

(4) 今後の課題

中小企業の再建が課題である。現在も目一杯お金を借りている人が多い。返済時期が来ればどうなるか心配である。

これからの神戸の産業は、積極的な産業構造の転換が必要である。大手企業は海外へ工場を移し、アジアからは安い製品が流入してくる。これにどう勝ち残って行けるかが課題である。

西神工業団地は3団地で5700億円の出荷額があるが、市全体では3兆2000億円である。

(質疑応答)

Q：当面の問題にもっと集中したほうがよいのではないか。

A：神戸の経済については従前に戻すのではなく、21世紀に生き残る産業づくりが必要である。中小企業、既存企業が勝ち残っていく競争力を

つけることが大事である。

次に次世代産業をつくること、中小企業の下請け体質からの脱却である。

Q：名古屋は郊外に大規模ショッピングセンターができ、都心の流通業は空洞化している。都心の商業機能を大切にし、神戸の都市性を生かした商業をつくるべきでないか。

A：六甲山から南に人口の7割の人が住み、北、西に3割の人が住んでいる。土地面積は南が3割、北、西が7割の比率である。震災前から都心の市場・商店街はしんどい状態であった。市場・商店街の再生に智慧を貸してほしい。

(提案) モータリゼーションを制限し、都心の歩く環境を楽しくし、商業と結び付けていくのがこれからの方向づけではないかと思う。

以上

こころと身体のかア

宮崎クリニック院長

宮 崎 隆 吉 氏

1. 震災の3年前から長田区で精神科診療所を開業していたが、今回の震災で全焼。中央区の自宅マンションも半壊。

1月17日の震災後、1月21日から長田保健所でとりあえず診療を開始、これを厚生省が追認する形で翌22日からは精神科救護所となった。

2月6日からは胃腸科と合同で仮診療所を開設、2月27日からは精神科単独の仮診療所となった。6月7日から現在地に診療所を開設、現在に至る。

2. 市内の精神科医診療所は、ほとんどがJR沿線に開設されており、今回の地震ではほとんどが大きな被害を受けて診療不能となった。

長田区の場合、一般の医療ボランティアとしては、日赤や AMDA が震災直後から被災地に入り、1月19日以後はとりあえずの緊急医療体制がとられていた。震災直後は外科疾患が多く、その後内科で急性感染症他の急性疾患と従来からの重症慢性疾患の病状悪化が見られ、その後精神疾患が問題となってきた。精神疾患としては、当初は従来患者服薬中断への対応が多かったが、次第に新規患者の割合が増加した。

長田区の救護所では1月21日から2月末までの間に、精神相談員2～3名、医師3～4名、看護婦1～2名の体制で延べ584名（重複受診があるため人数としては420～430名）の相談を受けた。うち約30%が震災後の発症であった。

受診内容は、神経症が多く、時期的に見ると1、2月に比較的多かった反応性精神病がその後減少し、かわってアルコール症が増加した。

3. 災害による精神疾患としては、

初期に 急性ストレス反応

既存精神疾患の増悪

後期に 適応障害・心因反応（抑鬱反応を中心に）

外傷性ストレス障害（PTSD）

がある。このような疾患を引き起こす災害ストレスとしては、

死と生存

喪失と悲嘆

立ち退きと定着

等があげられる。

災害時の心理経過は

衝撃期
 英雄期
 ハネムーン期
 幻滅期
 再建期

というふうにとどるといわれている。自分の場合に当てはめてみても、

当初	離現実感	
2～3日	放心期	
～1ヶ月	多動前期	将来をあまり考えず、不安もなく、受け身ながら活発に動いて対人交流も増加。
1～2ヶ月	多動後期	将来のことを考え始めるがまだ楽観的。
2～3ヶ月	疲労期	体調を崩し、要求が多くなり周囲に依存的なる。
3ヶ月～	再建期	現実に対処しはじめる。 利害対立がうまれ対人関係が悪化することがある。

という経過をたどり、一般的考察にはほぼ合致する。但し、サイクルが比較的短く、これが繰り返されるように思う。

4. 震災関連の新患としては女性が多く全体の約70%、疾患としては神経症が50%、鬱病が20%であり、これらをまとめて震災抑鬱と名付けた。症状には不安焦燥と行動抑制が次第に増加している。

またよくいわれる PTSD は、過覚醒、回避、フラッシュバック等の特徴を有すると言われているが、精神科の受診患者の中には少なかった。

被災者体験は精神病の経過と似ているところがある。「世界没落体験→委縮→抑鬱→エネルギー低下」という経過をたどることが多く、最後のエネルギー低下をどうするかが問題となる。また患者は被災者のみならず援助者の側にも発生している。自殺念慮が多いことにも注意したい。

5. こころと身体のカケアとは自立の援助である、ということを再認識したい。

新たな町づくり

神戸市長田区

まちづくり推進課長

谷口 時寛氏

1. 被災直後

防災担当の経験がなく現場で直面した。

地震当日は自宅をかたづけた後、車で出発、昼頃区役所に到着。その後一週間家に帰れず。17日中に70数人（約40%）が出勤。40人は避難所を開設、区役所本部は約30名で対応した。

被災地内部では被害状況はなかなかつかめず、伝えることもできない。一方、住民からは、被災状況、避難場所、安否確認の問い合わせが殺到した。

2. 物資

全国から一斉に食料品等の物資が大量に送られてきたため、交通停滞が発生。区役所では避難所への搬送の人手・車両が全く足りず、しかも庁内に保管場所が確保できず。

3月より、主食の搬送は市本部直轄で業者委託となり区の負担は軽減された。市本部と区との役割分担を早めにすべきであった。

雨漏り対策用のビニールシートや寒さ対策のカイロ、おしめ、粉ミルク、下着など必要な物資のニーズは日毎に変化する。

3. ライフライン

電気は3日間停電。コピー、ファックス、ワープロ、内線電話が使えず、事務所機能が麻痺。ニュースも携帯ラジオで聞いた。

ガスが止まり、調理と入浴が出来ず。水は4月まで出ず、水洗トイレ（下水道普及率ほぼ100%）が使用できず、仮設トイレも後始末が大変。ガス、下水、上水の事は問い合わせがあっても、区では答えようがなかった。

4. 倒壊危険家屋の処理

本来、自己責任で対処すべき問題。しかし、区としては本人及び周辺住民の強い要請にもとづき、倒壊のおそれのある家屋について、区独自で業者発注し、解体撤去した。

これは行政としてギリギリの線。それでも、今回の被害は、この様な対応で救済できる範囲を大きく越えていた。

解体撤去費用の公費負担は五日間で4,244件もの願い出書が出され、その後の処理が滞った。

5. 新たな町づくり

長田区は被災後、人口が減り続けている。建築確認でみると、東灘区は6割の復興、長田区は3割に達していない。原因は古くからの土地権利関係、敷地面積が狭い、高齢者が多く住宅再建に金がかかけられない等。

仮設4万人のうち2万人が長田区の人。雇用面でもケミカルは震災前の50%の売上げ。市では、市街地の大部分を震災復興促進区域に指定し、うち緊急かつ重点的に復興を行う重点復興地域を区内8ヶ所、約495㍍を指定し、土地区画整理や再開発事業、住宅市街地総合整備事業等も導入、ハード面での支援体制を設けている。

(質疑応答)

Q：区の対応能力の不足に関して、ボランティアの活用、大阪等の他地域へ支援を求める等が出来なかったのか。

A：ボランティアは当初、長田まであまり来なかった。また震災直後は混乱状態で、そこまで考えられなかった。

Q：市民自身にやってほしいことは。

A：現在、校区ごとの地図を作ってもらおうようにしている。自分のまわりの人は、それぞれで助けてほしい。

以 上

ボランティアとNPO

コミュニティ・サポートセンター神戸代表

中村 順子

1. 地域活動と私の15年間のかかわり

東灘区は勤労市民層の住宅を中心とし、大阪勤めの人が多い街である。人口は、震災前は18万人、77,000戸あったのが現在15万人に減少しており、92%の人が何らかの被害を受けている。

(1) 神戸ライフ・ケア協会における活動

この街で1982年から15年間、高齢化社会を迎えるに当って何か自分のできることはないかと考え、ライフワークとして高齢者の在宅援助事業を中心に地域のコミュニティーづくりに関わってきた。

この活動母体が、神戸ライフ・ケア協会である。この協会は640人の会員（90%が主婦）を擁し、サービスを受ける人から利用料を取って会を運営している。会員は活動時間を積立てその時間に応じて自らも援助を受けるという新しいシステムでスタートし、在宅で介護・家事の援助を通じて一人の高齢者を最後まで看取ると言う事業を行ってきた。

しかし、最近では活動する人と援助を受ける人が固定化する、力があつたり時間がある人だけが施すといった福祉の昔のパターンに逆戻りしてきた。これでは事業として成り立たないだけでなく助け合いにならないと思い、見直しが必要と考えていた。

こうした時期に起こったのが今回の震災である。

(2) 震災後の東灘・地域助け合いネットワークでの活動

地震以後1～2週間は一体何がどうなっているのか、何が起きているのか分からない状況であった。家族を失った人、ライフラインの途絶えた地域で人をどう助けたらいいのか分からなかった。

こうした状況の中で、東灘地域助け合いネットワークを立ち上げた。

2月に入って地域にはボランティアがあふれはじめたが、高齢者は家でじっとしている人が多く、この在宅高齢者の絞り込みを始めた。避難所以外の在宅高齢者に水汲み、通院介助や食事を運ぶという点から活動を開始した。

2月末には、仮設住宅が立ちはじめ東灘区内に約30ヶ所の仮設住宅ができ、7000人が入った。仮設住宅の横に、茶話やかテント（さわやかテント）という移動集会場を設置し、生活情報の提供や、高齢者を中心に「外に出てきなさい、話をしよう」といった活動を展開し、コミュニティーづくりにも取り組んでできた。

しかし、仮設住宅以外のところに東灘区には14万人の人口がおり、この内10数%の高齢者に対して何か出来ないか、仮設住宅でのサービスを一般地域に広げられないかと考え、震災後半年後の11月には区内の15の小学区毎に（大概1万人単位）区分し、民生委員協議会や医師会の協力を得て、高齢者の交流をすすめるふれあいサロンを設置し、活動の輪を広げていった。

(3) コミュニティー・サポートセンター神戸のチャレンジ

いろいろのことをやってきたが、ここまでのことは、しょせん”いやし”でしかない一方的な支援であり、援助する人とされる人が固定化してしまう側面から脱却できなかった。。

元気をとり戻せた人に、自立へのプログラムを作ろうとしてはじめたのが、コミュニティ・サポートセンターである。資金・拠点・コンサルティングを提供することによって、事業性のあるグループ作りを目標とした。

その仕掛けの中心は、仕事作りのグループで、服のリフォーム、車椅子での外出援助、自転車の修理、シニアコンピューター教室等など、会員の特技等を生かし、夫々の活動を通じて事業収入を得、年間 100 万円程度の自分達の活動経費を自分達で稼ぎ出す、そういう仕組みを作った。

そのことにより、真剣にかせがなければならぬことが大きなインセンティブになり、あるアルコール中毒の人が立ち直ったようなこともあった。仕事が人間性の回復につながった。

しかし、この活動が継続的、安定的に続けられるかという多くの課題がある。

2, ボランティアとNPO

ボランティアとNPOがどう違うのかということを別表で説明し、今までの活動の課題を含めて明らかにする。

- ・ Aの団体 ボランティア活動では一定の限界があり、事業の拡大もありえないし。社会の力になり得ない。
- ・ Bの団体 有給の職員もおり、一定の活動の広がりも持てたが、有給職員とボランティアとのあつれきが生じ、事業活動に資金面から限界。
- ・ Cの団体 一応責任ある組織となり活動の広がりもあるが、安定的、継続的事业となりうるかは行政等の支援がないと疑問。

(ボランティアセクターの抱える共通の課題)

人がいない＝活動する人でなく、全体をマネジメントする人、実務能力者が不足。
結局人かもしれないが、政策立案、能力、財源確保のノウハウがないことで行き詰まっている。

震災関係で現在50程の団体(※印)があるが、いずれも同じ悩みがある。

※(情報発信系・制度要求系・直接事業系・救援派遣系・サポート支援系)

(行政に言いたいこと)

ボランティア団体には基盤整備を。(行政に出来ること、市民にまわした方が良い生活サービスなどを明確にし、行革や規制緩和にふみきる。)

しかし、金が流れるシステムを作ってほしい。自力で財源確保できる力も弱く、税制などの基盤もととのっていない。少なくとも基盤となる事務所の確保、出来れば活動費の一部(1/2 越えないこと)助成をお願いしたい。

(別表)

コミュニティサービスを提供しているボランティア団体

団 体		A	B	C
主たる事業		・在宅高齢者、乳幼児のホームヘルプサービス	・被災地における高齢者の生活支援 ・コミュニティサービス ・被災地情報の提供	・コミュニティ活動や事業の支援、拠点提供、資金提供、コンサルテーション ・研究・調査・ボランティア活動の啓蒙
会員数		常時活動者 200人 (1時間600円の利用率)	常時活動者 150人	・育成グループ 直轄5グループ 外部2グループ ・研究事業 3本
スタッフ	(有給)	0人	常勤2人(有給) 非常勤2人	常勤3人
	(無給)	非常勤12人～15人	リーダー15人 (交通費、食費+月1万円)	0人
年間予算		30,000,000円	16,000,000円	30,000,000円
財源	(事業収入)	22,000,000円 (8割個人に還元)	0円	10,000,000円
	(助成金)	6,000,000円 (行政団体)	10,000,000円 (H9以降 激減)	15,000,000円
	(寄付金他)	2,000,000円	6,000,000円 (300人位から)	5,000,000円
事務所の形態		自力で賃貸事務所	行政より時限無償提供	財産区より時限借地上物事務所は自力建設
意志決定の方法		理事会、調整会議 (実務者6名、有識者6名)	常任幹事会 (実務者、有識者)	常任幹事会 (実務者、有識者)
行政との連携		助成金補助、合同研修	拠点提供、月2回の定例情報交換会議	情報交換
課題		・有給スタッフの不在 →責任の希薄化 ・同種の会員 (同一年齢の女性・主婦) →自己満足に帰する傾向 改革性の欠如 ・単助成→独立性の希薄化	・ボランティアは無償論 →事業概念の導入阻害 ・コーディネーターの不在 →スタッフと現場ボランティアの意志疎通の阻害 ・拠点確保 ・財源の確保→有給スタッフ ・リーダーの事業センス	コミュニティ事業の掘り起こし ・行政改革との連動 ・財源の確保 ・拠点の確保 ・男性のコミュニティ活動への参加 ・スタッフの専門性 ・住民の自主性

(共通課題) ・公私の役割 ・政治セクターとの連携 ・財源の確保 ・団体の基盤整備

アンケートの集計結果

阪神・淡路大震災の感想と復興に関する 提案募集アンケート

SAS神戸（日野）

以下の質問にお答え下さい。

- 1、皆様の周囲の方の震災の認識状況について（丸をつけ、感想があれば書いて下さい）。
- ①もう過去の出来事だと思っている人が多い。 ②今でも時々思い出し、話などをする。
③今も復興などで継続している出来事であると思っている人が多い。

<感想>

- 2、復興状況を見て来られる前に思っていた感想と比べ如何でしたか。

- ①予想以上に遅い。 ②予想どうり
③予想より早い。

<当初はどう予想していましたか。また見た感想をお聞かせ下さい。>

- 3、阪神・淡路大震災及び復興は、阪神・淡路地域の出来事だと思いますか。

- ①地域の出来事である。 ②被害の大きさからみて国家的出来事である。

- 4、震災復興は自治体を中心となって、既存の制度に乗っ取り行っていますが、国家が復興に前面に乗り出すべきだと思いますか

- ①思う。 ②思わない。

- 5、個人救済について、「個人の生業に必要な資金の給付または貸与ができる」という災害救助法がありながら、厚生省次官通知で「災害弔慰金支給法の資金貸与制度の運用で対応する」との方針に置き換えました。また国は「国に災害の責任はないので、個人の財産保証はできない」との考え方です。あなたの考えをお聞かせ下さい（米国2万2500ドルの個人援助あり）

- ①国は個人保証すべきである。 ②個人の問題だからすべきでない。

<感想>

6、阪神・淡路大震災のような都市を直撃する大震災は、他人事でなく、あなたの街でも起こる気がしますか。

①する

②しない

7、あなたはご自分の家庭、事務所、地域で震災対策を考えていますか。

①いる。

②いない

<対策についての考え>

8、阪神・淡路地域の震災復興について、あなたに良いアイデアがあればお聞かせください。

①被災者の救済について

②街づくりについて

③産業の復興について

④ボランティアについて

9、SASは今後どのように活動すべきか、災害支援、研究体制についてお聞かせ下さい。

SASの将来のあり方もふまえてお書き下さい。

10、最後にこうしたフォーラムを今後も開催すべきと思いますか。

①やるべき。

②他にまかしてやらなくて良い。

御氏名

ご協力有難うございました。

阪神・淡路大震災の感想と復興に関する提案募集アンケートの集計結果

ご参加の皆様にご協力いただきましたアンケートは、32名の方のご回答をいただきました。その結果を集約し、感想、提案、アイデアは各項目別に順不同で列举いたしました。

(注) 一部に重複回答がありましたので、その項目は重複集計となっております。

1. 皆様の周囲の方の震災の認識状況について

- ①もう過去の出来事だと思っている人が多い。----- (4)
- ②今でも時々思い出し、話などをする。----- (17)
- ③今も復興などで継続している出来事であると思っている人が多い。---- (12)

(感想)

- ・京浜地方ではそれほど身近で深刻に受け止めている人は案外少ないように感じる。
- ・一般の人は報道で知る範囲の会話。(実態にはせまれない)
- ・少なくとも5年は復興途上と思っておりますので。
- ・報道は1月17日を中心に少なされたが、不満の残る質、量であった。マスコミの取り上げ方に風化の原因があると思う。
- ・今の日本の課題がすべて復興の仕方に現れている。復興は究極的には貧者・弱者の課題となる。
- ・神戸に居住しているので、(私自身は転勤族ですが)住民の意識、無意識の中に震災は大きな影響を与えている。その前提、認識で何事も取り組まなければ、無神経すぎる。
- ・身内に被災者が居る人や、何らかの関係を持っている人以外は、もはや語られない事件となっている。
- ・10日後に実際に現状を見て、被災した友人を見舞って来ました。道1本隔てて格差がすごいのに驚かされました。親類もいるのですが連絡はとらず(とれず)友人宅から帰る際、交通停滞も経験しました。
- ・いつ災害に会うか、どこの地域でも起こることなので参考にしたい。
- ・細々とした個別の課題や問題は聞かれるが、大きな復興の理念やフレームが聞かれない。
- ・東京では、もう過去のことと思われているようです、困ったものです。
- ・コミュニティの再興、ダブルローンの解消などで良い智恵がでないか、考えさせられた。
- ・周囲の人で未だに関心を持ち続けている人は少ない。話として出れば少しは話すが、あくまでも自分の世界とは違うとの観点でしかない。
- ・現地に住んでいないと復興の事情や状況はわからない。(細かい事情がわからない)だから③の回答はあげにくい。
- ・残念ながら③は少数のように思う。
- ・川西に住み、大阪で仕事をしていると①の感覚です。町内では一部分のみが重症でしたが、神戸を見ると我々の事など何と不満の言えた所ではないというニュアンスがあります。
- ・関東地域の震災対策の話をする時は話題にのぼるが、神戸の話は過去のものになりつつあります。なるべく取り上げるようにしていますが。
- ・阪神間の方だけではないでしょうか。
- ・私の結婚式と震災は関連して記憶に残っています。

2. 復興状況を見てこられる前に思っていた感想と比べ如何でしたか

- ①予想以上におそい。----- (6)
- ②予想どおり。----- (1 2)
- ③予想よりはよい。----- (1 3)
- ④無回答----- (2)

(当初はどう予想していましたか。また見た感想をお聞かせ下さい。)

- ・思ったより住民の表情が明るい。
- ・一見復興したかにみえてもまだまだ。
- ・ガレキの山かと想像。
- ・被災直後の姿を見ていれば、考えは違ったかもしれません。阪神高速の回復が昨年までかかったのは遅いと思います。
- ・遅い・早い両面あり。三宮付近の表面のみなら早いと感ずる、バスで見た所では遅い。
- ・昭和35年にシミュレーションに行ったとき、前の戦争の砲爆撃の跡が残っているところがあった。神戸の公費による処置は非常によかったと思う。
- ・復興の予想などできないほどでした。半年余りあと、福岡の全国大会に参加の折、機上から目にした荒れ野の如く崩壊した神戸（その周辺と思っています）が忘れられませんでしたので、建築物がここまで再建されているとは思いませんでした。
- ・震災後、橋梁の損傷や復興状況の調査や見学で、ずいぶん神戸方面は通わせていただきました。地元に着したソフトな話と、高速道路などのハード話はずいぶん違うといった印象を持ちました。
- ・建物の建設が早かった、一方区画整理事業などの遅れが目立つ。
- ・金のある所は早く、ない所は復旧しない。
- ・各分野でのシステム的な再建の模索、非専門家、ボランティアの活動が目覚ましい事を実感した。
- ・三宮の駅に来て、ここが神戸かと思う位特徴のない、どこでもある街になってしまったと思わざるを得なかった。神戸もまた一地方都市の風景になっていくのかといった感想だ。
- ・以前見て来た所と違う所を今回見たので、良く分かりませんが仮設住宅の環境の悪さには驚きました。
- ・復興状況が遅いのか早いのか分かりません。ただ、時間のかかりそうなことだけは感じました。
- ・現場行く先でチグハグ感を受ける。
- ・三宮駅近くは以前と変わらぬようになりました。当初は、復興は遅々として進まないのではと思っていました。三宮周辺は空地のままと考えていました。
- ・何とか生活できる状態にまでこぎつけておられる。
- ・今の状態までもどるのに3～4年かかると思っていた。2月19日に見た、まっ黒な焼け跡がすっかり白っぽい風景になっていて驚いた。
- ・直後に数度、昨春、今回と見ている訳ですが、なかなか元には戻らない。しかし何かしらバランスが成立していると感じました。
- ・東京の人は、そごうの再開、阪神高速開通等で復興は進んでいると思っている。

3, 阪神・淡路大震災及び復興は、阪神・淡路地域の出来事だと思いますか。

①地域の出来事である。----- (2)

②被害の大きさからみて国家的出来事である。----- (30)

- ・今や国レベルで考える段階、少なくとも経済ベースではなくなりつつあるのではないか。結果として国家的な影響が出るということだけではないか。
- ・国がやるならそれなりの方法があるし、市民がやるならそれなりの方法がある。

4, 震災復興は自治体を中心となって、既存の制度にのっとり行っていますが、国家が前面に乗り出すべきだと思いますか。

①思う。----- (23)

②思わない。----- (6)

③無回答。----- (3)

- ・積極的に行うべき。復興の手助け（ノウハウの提供、資金等）はすべきだと思うが、主導するのは地域。
- ・ただし、国はハードな面と一部ソフトな面に限定し、自立自助を前面に出す形が良い。
- ・国は予算歳出の公平性の観点から金を出すべきだが、前面に出る必要はない。
- ・官民協力などきれい事である。
- ・国はテーマや内容によって進め方や役割がちがってくる。
- ・法的制度的部分で整備されていない現時点では国が出ることが必要である。
- ・自治体が前面であるべき。

5, 個人救済について、「個人の生業に必要な資金の給付または貸与ができる」という災害救助法がありながら、厚生省次官通知で「災害弔慰金支給法の資金貸与制度の運用で対応する」との方針に置き換えました。また国は「国に災害の責任はないので、個人の財産保証はできない」との考え方です。あなたの考えをおきかせ下さい。（米国2万2500ドルの個人援助あり）

①国は個人保証すべきである。----- (24)

②個人の問題だからすべきでない。----- (4)

③無回答----- (4)

(感想)

- ・神戸の方々には同情するが、同じような震災に遭っている北海道、三陸の方々の場合もあり、神戸だけ特別扱いできないのでは。
- ・雇用保険の特別措置はたった1年ではなく3年は必要。
- ・政府としては財政上の見地から、個人保証については躊躇するが、政治的には、個人援助すべき事柄。
- ・国に役割として天地異変等の災害時の救援、最低限の保証は必要。
- ・個人あつての国だと思います。給付は可能な限り多く。井の中の蛙といわれるでしょうが。

- ・公的なサービスが不備で失われた財は保証対象となる。道路損失、火災の拡大など。（空中からの消火も可能だったはず）
- ・国は地方への金の配分バランスをチェックする機能と、逆に個人への直接的支援機能を持つ必要があると思う。
- ・「持っている人」に対する保証は意味があると思われる。「持っていない人」の問題をどうするかということが肝要だと思う。経済的格差の増大、そのことによる「持っていない人」の無力感の広がり生活意欲を失わせ、国家的保証の対象となるおそれがある。
- ・国の法制度、税制度を検討した上で考えるべきである。ただ、今の日本の自己責任を伴わない民主主義のもとで、個人保証は難しいかもしれない。
- ・最低必要額は国が出しても良いと思う。
- ・国が助けるのはあたりまえだと思う。
- ・単純な個人保証というよりは、大きな理念や政策にそった保証という考え。単純バラマキ的なものでない。
- ・ある程度の金額まではバラまいてもいいのでは。最後は所得税、市民税を納める市民が元気になってくれて、もとがとれると思います。
- ・どちらか判断するほどの材料が揃っていない。
- ・「最低ギリギリの限度額を設定して」という条件の下で、家族人数に応じて一律の保証をすべきである。
- ・個人保証の試みはやってみたらどうかと思いますが、他方では今日神戸市内で交通事故に遭った人には何もないということから考えると、何をおいても国民の互助システムが必要かと考えます。
- ・本当に援助を必要とする人は、国で何らかの援助をする必要があるが、阪神震災とは別に考えた方がよいのではないかな。

6, 阪神・淡路のような都市を直撃する大震災は、他人事でなく、あなたの街でも起こる気がしますか。

- ①する。----- (26)
- ②しない。----- (3)
- ③無回答。----- (3)

- ・日本列島に逃げ場はない。

7, あなたはご自分の家庭、事務所、地域で震災対策を考えていますか。

- ①いる。----- (18)
- ②いない。----- (12)
- ③無回答。----- (2)

「対策についての考え」

- ・自宅の住居について、構造上震災対策を施し、災害時の身の処し方について具体的に考えて居る。
- ・持ち出し用荷物を常にベッドの側においている。お風呂の水を常にはっておく。

- ・東京で地震が起きた場合、家庭では1週間程度の自給自足の準備はあるけれど、ほとんど対策は考えていない。
- ・私の家族は東京、大阪、四国に分散しております。結果としてリスクの低減に繋がっています。
- ・タンス等の固定、非常食、水、コンロ等の用意。
- ・公的対策が不明で、個人別対策には限度がある。
- ・1週間くらいの物資を貯えている（炭、七輪、お水、お米 etc 現金も）・家具の固定
- ・地域の中で助け合おうということを日頃から話している。
- ・関東はいつも地震が来ると信じてくいらしていますので、大震災後戸外にも物資を貯える必要性を学びました。
- ・少しづつですが、自分の家で話をし、大学でも神戸大学の事例などを参考にして初期活動のありかたを話し合っている。
- ・食料、水（風呂）の準備等
- ・家具の転倒防止、備蓄の水、食料、システムに対して確保、お金等ペーパー以外の方法による資産の確保（安全分散）、避難袋、キャンプによる家族の訓練。
- ・各事業所で危機管理、救援体制について検討する必要がある。今回の震災の教訓を生かしたマニュアルの作成。
- ・一応最低限の準備（防災グッズ）はしてあるが、そのままになっているので、実際役に立つか不安である。
- ・日常の備え、事務所の移転。
- ・東京では何もしていません、おさむい限りです。
- ・考えなければいけないと思っているが、具体的なことは何もやっていない。
- ・食料と水の用意、家の耐震補強について考えている、地震保険に加入した。（名古屋市は水道が使えない時のために市内のあちこちに水がめをつくりはじめた。）
- ・火の元のチェックなど以前より気をつかってはおりますが、テンションは落ちていると思います。
- ・避難セットを常備しています。事務所は耐震性のあるビルに移りました。

8. 阪神・淡路地域の震災復興について、あなたに良いアイデアがあればお聞かせください。

（1）被災者の救済について

- ・基本は個人の自助努力によるが、国や自治体も最大限の救済をすべき。ODAなどで海外に資金援助をするより国内のODAを優先すべきだろう。
- ・コミュニティのネットワーク、日頃の隣り近所、医療・福祉施設を核にしたコミュニティーを地域ごとに作っておく。
- ・官僚的中央解決策から脱却する必要がある。地元の行政官は善戦していると思う。
- ・災害時には「救急」を統括するプロを育成し、生命線を確保出来る体制を作る。（あくまでも初期のみで、速やかに地域にバトンタッチする）
- ・各項目について・今回のフォーラムで問題は認識したが、特にアイデアはない。今後継続的に色々考えてみたい。
- ・短期的な救済政策と、長期的な弱者対策がどちらも中途半端である。
- ・早急に民間が住宅を建てられる形式を整え、利子家賃補給の形で援助し、行政の足を引っ張らない形をとるべきでないか。

- ・結局、最後は貧困者、障害者等の社会的弱者の救済が残ってしまう。日常的に、個人、家族、地域社会の足腰を強くする政策を行っているかどうかは本当は一番大切なことだと考える。
- ・基本的にはライフセーバーの場合のように、少なくとも専門的な知識、技能を持つ人材の育成が大切で、スイスの国民皆兵と同じように、日本は災害の多い国なので、災害対応のため国民全体が参加する機会を創るべきである。
- ・初期はまさに個人個人がやるべきで、やって来たと思う。
- ・被災者のおかれている状況も、考えも多様と考えられる。→ニーズ把握と分類。
一律的な対応でなく救済案を作成するのと、全体の救済のコンセプトを明確にする。
- ・他都市の者からすると、どこの誰が何を求めているのかの情報が先に必要。物なのかメンタルなのか言いにくい事もあると思うので、住民の意向を引き出したり、読み取るコーディネーターが不可欠。手段としてはホームページなどのほか、自治体間、団体間（S A Sなど）で情報網を持つのがよい。今回は被災サイドからの情報発信次第で忘れ去られるのか、顕在化するのか分かれるのではないかな。
- ・産業の復興とリンクさせて考えるべきと思う。根本はすべてをなくした方、家族の多くのなくした方など生活の救済も大切だが、職をなくした方に対して産業の復興と合わせて雇用の創出を高めていくことが大切だ。
- ・各自の自主的計画を可能な限り支援する（個人的救済を含めて）方向が良いと考える。
- ・仮設住宅は何とか早急に対応の必要性があります。ポートアイランドの殺風景な中に建っているのには驚きました。
- ・今からでも特別立法すべきと思うが、マスコミ等関心が薄れている。
- ・現在ある資金の中で援助しましょう。

（２）街づくりについて

- ・通常の街づくりとの決定的な違いは時間との戦いということである。昨今はむしろ住民ワークショップなど時間をじっくりかけてやっていく傾向にある。災害復興においても早急に進めていくこととやはりじっくりやることを分けていく必要がある。震災前と同じ住居形態、営業を望む人、これをきっかけに転換を図ろうとする人、外部から来て住み、営業してほしい人、イメージを明確にしていくべきでないか。商店街も旧態ではなく、やる気人間の公募も必要だ。
- ・人と車の共生をもとにして、どちらかというと人中心でありたい。界わい性、下町情緒との上手なスリ合わせを考えてください。
- ・都市基盤の強化につながる智恵と工夫を。追加費用なく、運用コストを低減しつつ強化する方法がありそうだが。
- ・時間が必要。
- ・被災市民が努力することでしょう。
- ・緊急の対応――弱者対策にもっとアイデアを出し、自立に向けての援助を。
長期的展望――思想、理念の共有と確立が必要。日本の街には人間が住むための思想がない。儲け主義、競争主義によって食い潰されている。
- ・時間が経過するにしたがって私権意識が強くなってくる。行政主導にしても、市民主導にしても権利調整に巻き込まれたら街づくりはろくでもないものになる。どちらにしても瞬間的に権利の凍結をすべきであった。
- ・行政と住民が検討会を開いて、双方の考えを持ちよれば、より理想的なものが実現できると思う。（再開発等について）

- ・物理的（ハード）な街づくり論ばかりでなく、人の社会としての精神的、文化的なテーマを長期的に考えていく。歴史的な出来事として事実や課題を後世に伝えていく。
- ・商店街は条件提示でコンペをしたら。
- ・既になされているようだが、単なる復興でなく、震災を気に将来への発展のための開発と捉えるべき。そのためのコンセンサスを官民で形成していくべきだろう。
- ・近隣の避難所に救急のための道具、水を常備。（公園整備）女性住民の参加が大切。安心ネットワーク、正確な情報の伝達（ラジオ、パソコン）ができるシステム整備。
- ・平常時に、幹線道路、公園等、理想の都市計画を作成しておき、これに基づいて整備していく。再開発が可能になる唯一のチャンス。
- ・公権力と個人の権利の問題については、神戸で基本的に詰められているのでしょうか。
- ・個人の犠牲が大きすぎる街づくりはすべきでない。（区画整理事業として整理することと、住民の納得が得られてからすべきである）

（３）産業の振興について

- ・工業では、震災をスクラップアンドビルドの機会ととらえ、新しい設備投資をすべき。商業では新しい形態の商店街を模索すべき。復興の過程で得たノウハウを、開発途上国や同じ災害地域の復興に役立て、ビジネス化してもよい。
- ・全国的、国際的支援が必要。自助努力だけでは無理。高齢化社会にふさわしい産業復興を。
- ・中にまで立ち入ることは無理で、企業の自由にまかせるしかない。但し①交通、通信等のインフラの整備。②税制等の制度面での特例を考える等の事で投資に有利な環境を作る必要がある。
- ・当事者努力に任せすぎている。既存の制度では出来ないことが多いので、既存の体制を変える方策が必要である。
- ・新しい産業を早急に立ち上げ、若者が定住できる形に街づくりをすることができないか。
- ・戦争の復興の場合のように、これを機会に産業そのものを変えてゆくチャンスだったのだが、「皆それどころでない」というコンセンサスで転換が行われない。
- ・国や行政がしなければならない、短期戦略と長期戦略の形成と現場や企業が当面しなくてはならない課題を明確に分ける。議論や立案が混乱している。（外部から見ていると何をどう努力しようとしているのか分からない。→無関心化につながる）
- ・経済特区の無税地区をつくったらどうでしょう。
- ・産業の中でも個人企業など特定してみると、産業ありきの前に地域に住み続けるエモーションを作ることの方が先ではないか。個人の技に応じて産業は後からついてくる。
- ・人が持つ可能性を支援する仕組みを。
- ・復興資金を出すべきでしょう。

（４）ボランティアについて

- ・学校教育でもきちっと教える必要がある。とくに緊急時の行動選択、組織化、被災者へのケアなど数多くのケーススタディを積まないと有事に役立たない。防災訓練などにも、もっとボランティアを組み込むべき。
- ・ボランティアは日頃からきちんと登録管理しておくべきだ。ただ手を貸したいと言ってもレベルがマチマチで困るはず、ある程度のレベル統一は必要と思う。

- ・悪い面があるとしても基本は振興。
- ・分かりませんが、恐らく期待すべき活動ではないのでしょうか。
- ・日常からのボランティアの実践。その中での訓練、モラルの育成等が必要。これらの基盤づくりが大切。
- ・ロジスティックを考えるべきで、後方支援のボランティアを作る必要がある。
- ・各種の団体があり、専門的なスタッフを揃えているNGOもあるが、個人的に係わる場合、窓口が必要だろう。窓口にはある程度経験のある者が当るべき。（「幼い難民を考える会」数箇所の保育所を援助した。）
- ・海外での事例を含めてはやく基本的なあり方を整理する必要がある。ボランティアの役割を越えた存在になっていってしまう。
- ・労働力の提供――多少なりとも謝礼を与えるなりして、多少は報酬として報いるべき。
資金提供――継続的に資金援助を求め、それを基金にして運用し、復興活動に役立てる。
- ・日頃からどこに行けばよいか、聞けばよいか、知っているようにPRが必要。行政でもコーディネーターの養成が必要。
- ・NPO法の制定。
- ・ボランティアの供給側と需要側のすり合わせが出来る市場をつくる。インターネット等を使えば可能である。
- ・受入側がしっかりしていないと、ボランティアには問題が多く内包されている。

9, SASは今後どのように活動すべきか、災害支援、研究体制についてお聞かせ下さい。

SASの将来のあり方もふまえてお書き下さい。

- ・各地のSAS通信のホームページなどで、各自の情報交換などが常識的にあってもおかしくない。神戸の復興がテーマならSAS神戸が問い合わせ、相談などの情報発信をすべき。なにを求めているのかをまず先に提示してもらいたい。
大集会ばかりでなく、テーマに応じてオールSASの中で適材を呼んで、継続活動をしてもいいのでは。
- ・いくつかのたとえば、前項8, の(1)、(2)、(3)の様にテーマごとにプロジェクトを結成して具体的な活動を行うなど、SAS神戸のみではなくSAS全体として活動できればよい。
- ・継続しましょう。竹川さんの初心の「語りべ」。
- ・「何を考える必要があるか」を研究・広報する。
- ・自己満足的な活動をして、他の組織がやっているようなことをやっても仕方がない。長期的に「神戸」の新しい顔ができるかどうか研究しなければならない。
- ・いろいろな企業、役所等に所属している方が多いSASだから、自分が仕事上得た知識・情報は（マル秘でない限り）皆に伝えるべきだと思う。（アメリカの危機管理のやり方など）
- ・基本として「SAS神戸」は、全国のSAS会員と「神戸のテーマ」を結ぶ接点（協力を受けた人と協力の出来る人とを結びつける接点・窓口）としての役割を考える。窓口機能としてのコンセプトと内容を決める必要がある。（SAS神戸の会員一人ひとりの復興プロジェクトへの参加はそれぞれにあるというのは当然として。）
- ・様々な視点からのアイデア提供、実験都市づくりはネットワークで進められる。自分の時間の一部は提供したら。
- ・復興支援に資金は難しいであろうから、**知的支援（アイデア、知的労働の提供）**を継続してい

くべき。

- ・被災者が気がねなく避難できる宿が提供できるように。
- ・（１）記録 語り部を含め、行政等で記録できない部分は特に重要。
- ・（２）分析 重要な要因の明確化。
- ・（３）提言 今後の方策検討への参考。
- ・ＳＡＳ神戸の方々の活動を拝見して、ＳＡＳの存在意義、改めて認識いたしました。
- ・税金は災害復興にこそ投入すべきであると思う。
公社・公団（リゾート開発等）は１００程度整理してそれに投入されている税金等は、一つの災害復興公団を設置してプールしましょう。
アミューズメントは、役所がでしゃばるものではなく、ＳＡＳが担当すればよいのです。

・ＳＡＳはいかにあるべきか

- ①今回のフォーラムは大変有意義でした。スピーカーの話も具体的で迫力があり、現地見学も参考になった。
- ②今回のフォーラムの様子を全国のＳＡＳのメンバーに知らせた方がよいと思う。
- ③昨日歩いた所を定点観測地点として、３年に一度位歩いてみて議論をするのはどうか。
- ④ＳＡＳは規約、規則が一切無い集まりと私は理解しています。参加、脱退自由、選択の自由があるからこそ２０年間も全国各地に息づいています。いかにあるべきかは、この一語に尽きると思います。
ただし、ＳＡＳのメンバーは如何にあるべきかは大いに議論をし、一人一人が考えた方がよいでしょう。ＳＡＳのメンバーは一味違った人たちであるという前提で、自由なＳＡＳの集まりと、各人が地域社会、職場にいるときの規則社会で何をやるかということになります。その中で各人が、或いは何人かの同志、同好の人達が共同で行動を起こすのもよいし、また夫々の周辺にいる人達に影響を及ぼすのもよいことだと思います。
- ⑤今回のフォーラム、主催、共催の幹事さん、大変有意義な事をして下さいまして、厚く御礼を申し上げます。
阪神の皆さん頑張って下さい。
各地の皆さんは、自分でできることから周囲に働きかけて協力をして下さるよう期待します。

１０、最後にこうしたフォーラムを今後も開催すべきと思いますか。

- ①やるべき-----（２９）
 - ②他にまかしてやらなくてよい-----（０）
 - ③無回答-----（３）
- ・来年１月１７日前後にＳＡＳのホームページにいれる。
 - ・研究成果を何らかの形で報告していくべき。
 - ・２年後位にまたＳＡＳ的なフォーラムをお願いします。
 - ・風化するのか否か。
 - ・やるべきとは言わないがやってほしい。
 - ・毎年でなくていいですから、３年後（２０００年）８年後（２００５年）開催したらどうでしょう。
 - ・２年ごとぐらいに開催してはどうか。（同様な意見が外にもありました） 以 上

フィールドワーク

「阪神間は今」 フィールドワークより

S A S 神戸

上谷 重男

震災直後、某雑誌に下記の六点を家屋調査を行いながら感想として述べた。

- 第1点 倒れるべくして倒れた建物が多く見られた。（設計、施工に疑問が多い）
- 第2点 倒れてはならない建物が早い段階で使用不能になった。（公共建築、病院、消防署）
- 第3点 心和む蓄積ある町並風景を失った。（これらの地域は、写真映りの良いイベント的な捉え方をされていた）
- 第4点 指定されていた避難場所が機能を持っていなかった。
- 第5点 地域地形に合った都市構造を作る必要がある。（海、山の景観長所が今回ネックになった）
- 第6点 バイエリア地区の共通課題があらわになった。尼崎から西への臨海部の古い住宅に住んでいて、今迄なんとかなるであろうと思われていた問題が明るみに出た。

これらの問題がどうなってきたのか？

解決されつつあるのか？建物の設計、まちづくりに携わってきた者として、現在の状況を述べる事により、なぜフィールドワークの計画を行ったか、理解していただけたと思います。

そのコースは、震災の影響が色こく、今なお残っている山陽電車の月見山駅を出発点として、阪神電車の芦屋駅までの車窓からの風景（鷹取周辺、兵庫の真野地区、阪神の石屋川駅周辺）を見てもらい、阪神芦屋駅からJR芦屋駅までは歩きながら地域の商店街、一定水準を保っていた住宅地域の復興状況を見てもらう計画とした。

震災の教訓とは何だったろうか。それは、確実に来る高齢化社会の地域づくりに、我々は何をどうすればよいのかの問いかけであったように思う。

震災は建築やまちなみばかりでなく、われわれの生活にも壊滅的な打撃を与えた。緑の丘陵地と地場で生産された瓦で作られていた淡路島の風景、建築文化、地域づくりの中で一定の水準を保ち、地域生活と都市環境とに一体性があつた、住吉、御影、芦屋、夙川、西宮などの阪神間の田園都市風景がことごとく崩壊した。この後、それまでの記憶や蓄積を考慮しない住宅が建ち並ぶことになり、住宅カタログ写真に出てくるような、どこにもある風景になりつつある。

一昨年、被災地では、全壊、半壊の建物の取り壊しに公的資金が投入された。まだ補修すれば十分に使用が可能な建物も多く取り壊されてしまった。これは社会ストックの損失であると同時に、我々の地域記憶の急速な喪失につながった。地域再建に際して特質を考えるよい機会であつたにもかかわらず、そうならなかった。

このような兆候は十数年前から見られていた。住宅を求める人々はメディアがつくった「中産階級」という快い呼び名に幻想を抱き、カタログに書かれている「平和な家庭」に夢を描いた。

そののち、人々は住宅にも「個別化」を求めたが、結果として出てきたものはスペックで固めた選択の幅が限定された無個性な住宅だったという皮肉な現象が起きてしまった。

そして、バブル時代、本来は、楽しみながら社会ストックを残す時代であつたにもかかわらず、食べたり、着たりといった単なる消費に終わってしまった。そして今、私たちはあのような成長を信じた時代の終わりを知り、あの時期を悔やんでいる。今回、兵庫県南部地震は新たな蓄積と継続ある地域景観、建築文化を再び創るよい機会であつたはずだが、そうしたこととはほど遠い方向に進もうとしている。

住宅は本来、地域風景を構成している大きな要素である。しかし、「木造在来工法は地震に弱い」という情報を人々が信じ込み、プレハブ住宅メーカーの営業力と宣伝力により作られる住宅が建ち並ぼうとしている。全国どこにいても住宅展示場のようにになってしまう。あたかも、景観のコロニアル（植民地）化と言った様相である。

当然、それらによって構成されているまちなみに地域特性を求めることは無理だ。建築は、単なる使用目的に役立つというだけでなく、一人一人の人間の喜びや希望、あるいは地域の記憶や願望に形を与えるために創られてきた。それは人々の共通の祈りにも似たものであつたはず。

神社や寺の前に立った時、その建築空間に心を揺さぶられた人は多いであろう。建築や地域づくりは人々の生活の共通の創造行為と考えるならば、地域景観もそのようにいえる。

その地域景観を考える時、先進的な事例としてよく挙げられるドイツでは人々の中に地域を愛する心が育っており、自分達の住んでいる地域に特別な想いを持っている。ドイツでも当然、地域景観に対する考えは人それぞれに異なっているが、住んでいる人々の共通の想いは地域を良くしたい、歴史的な蓄積を生かしたいという意識である。

このようなまちなみには、私達の身近な所でも出会うことが出来る。雪に埋もれた白川郷。京都の清水寺周辺、また、山あいの道を車で走っていると、突然眼前に飛び込んでくる建築と自然との調和した、かつては日本のどこにでも見ることでできた風景。これらに出会った時、私達は心が和むと同時に身震いする事がある。その心のやすらぎの奥底には、地域を良くしたいという共通意識が働いているのではないか。

そのような共通意識が比較的あると思われる地域、芦屋に降り立った。駅ホームから望む海、芦屋川、六甲の山並、これらは地域風景の根源要素であると同時に住む人々の心の風景。地形風景と異り、地域の人々が築いてきた三八商店街からルナホール、そして、住宅街の生活風景。これらを眺め終えた後、JR芦屋駅前の喫茶店で話し合った。

その中で出た話しの一つに、プレハブ商店がポツン、ポツンと立ち並び、買物客もまばらな商店街にある（時計屋さん）の事が異様な光景として話題になった。おそらく、この店主にとって売上額がどうだとかの問題ではなく、この店を開くということは（生きている）（社会に参加している）証の表現なのであろうとの結論になった。この光景は次のことの問いかけでもある。

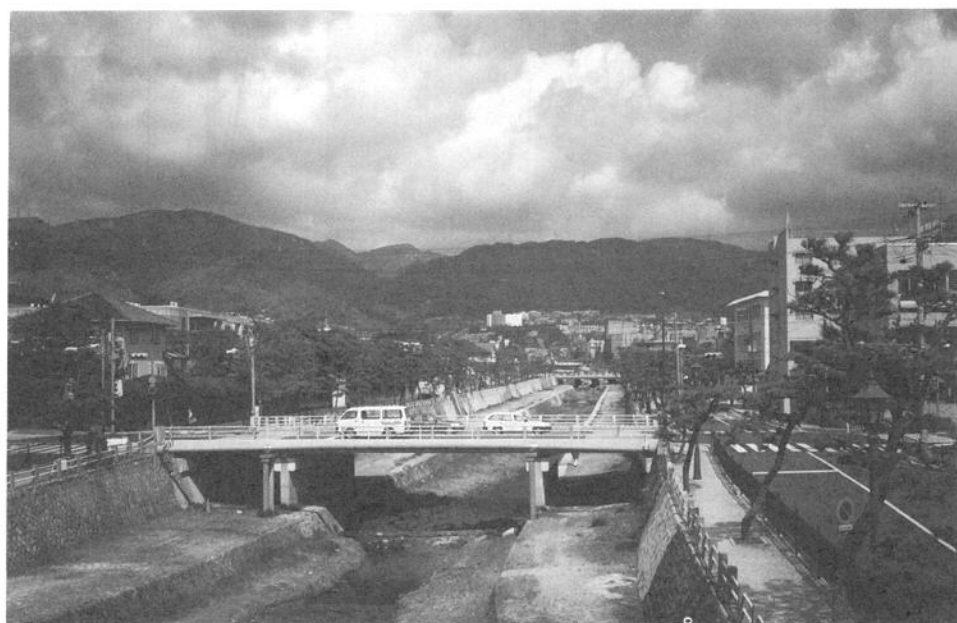
現在やっている多くのまちづくりは健康な比較的若い世代をターゲットにしている。しかし、確実に高齢化社会が来ることが分かっているにもかかわらず、若年層だけをターゲットにする事は、時代遅れなおかしな町を創っているといえる。先日の厚生省の調査でも、高齢者の割合は2025年には27.5%、2050年には32.3%を占めると予想されている。いまある地域を見渡してみても、若者が楽しめ働きやすい町は、高齢者には楽しめない働きにくい町であるが、高齢者の楽しめる働きやすい町は、若者も働きやすい楽しめる町であることがわかる。

震災は、21世紀に確実に来る高齢化社会に対応した地域づくりをどうすればよいのかの問いかけであったし、この高齢化社会の地域問題は、2025年頃それを支える40代以下の人こそ真剣に考えるべきだ。

地域の将来は、空のかなたから飛来するものでも、全能の神がもたらすものでもなく、現在のなかに潜んでいる。

SASの皆さんが阪神南部のまちづくりについて考えていただける機会の一助になればと思います、と同時に、これはまもなく訪れる日本全体の問題なのでは？。

以上



阪神芦屋駅より・芦屋川



芦屋市の旧商店街・三八商店街の現状 平成9年3月24日





芦屋市の住宅街 平成9年3月24日



芦屋市の住宅街 平成9年3月24日





新たに建ち並ぶ住宅 平成9年3月24日



新たに建ち並ぶ住宅 平成9年3月24日



資料

S A S 神戸 震災2周年フォーラム

阪神・淡路大震災から、はや2年を過ぎました。

被災地では住宅が建て直され、復興プロジェクトの計画も進みつつあります。一方、神戸市の人口は震災前に比べ10万人減少したままです。また兵庫県全体で3万8000戸と避難者の7割を超える世帯が仮設住宅から出られないままです。

震災により神戸地域の個人、都市、社会は多くの難問に否応無く直面させられました。そしてこれは多くの地域にとって、明日出会う課題となるものかもしれません。

私たちは、この2年間考えてきたことを全国のS A Sの皆さんと共有したいと考え、神戸において本フォーラムを開催いたします。

S A S 神戸一同

プログラム

2月8日(土)

13:00	見学	＜フェニックスプラザ＞
14:10		フェニックスフレンズによる説明
14:10	開会	＜フェニックスプラザ＞多目的ホール
14:20		
14:20	移動	＜フェニックスプラザ＞→バス乗り場
14:30		
14:30	視察	ポートアイランド第2仮設住宅 南駒栄仮設工場 大正筋商店街、六間道商店街 ケミカル集積地区 鷹取東第一地区
17:00		
17:00	到着	＜シーバル須磨＞
17:30	休憩	
17:30		
17:30	報告	＜シーバル須磨4F 須磨海峡＞ テーマ【S A S 神戸が見た阪神淡路大震災】 講師 S A S 東京 竹川 征次氏 S A S 神戸メンバーによるコメント。
19:00		
19:00	食事	＜シーバル須磨5F 松風＞
20:30		

2月9日(日)

		＜シーバル須磨5F 松風＞
9:00	報告	テーマ【産業・経済の復興】
10:10	議論	講師 神戸市産業振興局 商工課 課長 町本 欣信氏
10:15	報告	＜シーバル須磨5F 松風＞ テーマ【こころと身体のケア】
11:25	議論	講師 宮崎クリニック 宮崎 隆吉氏
11:30	報告	＜シーバル須磨5F 松風＞ テーマ【新たな町づくり】
12:40	議論	講師 神戸市長田区まちづくり推進課 課長 谷口 時寛氏
12:40	食事	＜シーバル須磨＞
13:20		
13:20	報告	＜シーバル須磨5F 松風＞ テーマ【N P O のあり方】
14:30	議論	講師 コミュニティ・サポートセンター神戸 代表 中村 順子氏
14:30	閉会	
14:30		
15:30		フリーディスカッション【災害におけるS A S の役割】
17:30		
14:30		
14:30	フィールドワーク	【復興途上のまちづくりを見る】
17:30		

オプション

S A S 神戸 震災 2 周年フォーラム参加者名簿

氏 名	所 属	勤務先
生山 智巳	東京	日産自動車 (株)
宇高日出男	〃	新日本証券 (株)
内田 和義		通産省通商産業研究所
大島 義一	〃	通産省
金成 洋治	〃	(株) 日本総合技術研究所
金成 正子	〃	
黒田 英一	〃	(社) 日本リサーチ総合研究所
平木 俊一	〃	日本興業銀行
松岡 温彦	〃	住友信託銀行
松岡 玲子	〃	
渡辺 龍雄	〃	(財) データベース振興センター
竹川 征次	〃	(株) ドウタンク・ダイナックス
藤田 憲一	横浜	三井不動産
菊山 正史	神戸	神戸家庭裁判所
奥谷 純古	名古屋	名古屋電業 (株)
尾関 利勝	〃	(株) 地域計画建築研究所
山田健太郎	〃	名古屋大学
横井 太郎	〃	(株) 東鮮本店
小島 裕一	〃	大成建設 (株)
杉浦 昌樹	〃	
中辻千代江	〃	(株) ファス
大橋 浩	京都	(社) システム科学研究所
神谷 潔	〃	写真家
小松満貴子	〃	武庫川女子大学
上田 暁亮	〃	京都大学

氏 名	所 属	勤務先
水谷 文俊	関西	神戸大学経営学部
堀 比呂志	〃	(株) 関西総合環境センター
宮崎 泰夫	〃	新日本コンピューターシステム
森ノ木 徳信	〃	(株) 日本建築協会
加福 共之	〃	(財) 関西エネルギーリサイクル科学研究振興財団
小沢 善雄	〃	近畿大学
藤田 昌弘	〃	(株) 関西情報センター
西岡 透	〃	
有田 雅一	和歌山	和歌山市役所
谷脇 幹雄	〃	和歌山県
石田 剛	広島	広島修道大学
養毛 邦昭	九州	福岡市社会福祉協議会
田中 晶	但馬	豊岡プリント社
市村浩一郎	神戸	阪神・淡路コミュニティ基金
阿久根昌夫	〃	日本IBM (株)
上谷 重男	〃	U建築企画室
大塚 明	〃	神戸法律事務所
菊枝 英興	〃	富士フィルムロジスティックス (株)
小松 大作	〃	(財) 神戸国際交流センター
多田 裕子	〃	主婦
友久 和幸	〃	(株) トモヤ
日野 孝雄	〃	姫路独協大学 地域センター
表具 喜治	〃	兵庫県
山岡 高士	〃	(株) ジェイ・アイエスアイ
湯原 正樹	〃	山一証券 (株)
横田 朝行	〃	(株) さくら総合研究所
吉田 昭彦	〃	地域学研究処 つゆのむら
黒木 直人	〃	黒木デザイン
馬越 和夫	〃	(有) フォセコ・ジャパン
岡橋 広明	〃	そごう

SAS神戸「神戸大震災の記録」プロジェクト
～ 語り部通信① その時、必要な道具 ～

今回は大震災時に必要な道具といった切り口でヒアリングの中で聞かれたポイントをお伝えします。被災者のお話を聞くと、消防署、自衛隊等の公的な救助に時間がかかってしまい、一番頼れるのはご近所による救助活動でした。試行錯誤を繰り返しながらの必死の救助活動。ライフライン復活までの生活の中から浮かび上がってきた、道具とは何なのかを考えたいと思います。テーマに分けて6回お伝えいたします。

□ 救助活動に必要な道具 → のこぎり、バール、車のジャッキ
「ジャッキをみんな持ち寄って、二つ三つ持ち寄って上げました。ダメな所はすぐのこぎりですべて切って、それで引っ張り出しました。」
(YH)

□ 被災地での情報源 → ラジオ、FAX、PHS、携帯電話
「特に電気がダメだったから情報は口伝かラジオしかありませんでした。」(YH)「FAXは動いていたので、ずいぶん助かりました。」(SU)「緊急時の避難所となる所では電話回線の数を増やすか、相当数の携帯電話あるいはPHSの配分ができるように考えておく。」(AO)

□ ライフライン復旧まで → カセットコンロ、木炭、ビニール袋、ポリタンク、サランラップ、非常用飲料水、非常用食料
「燃料としては、熱源の一部を電気に頼りました。カセットコンロも幸い2台調達できましたが、多人数の場合は限界があるので、結局庭に持ちだした木炭とコンロが活躍しました。」(AY)「六甲山の裏側の自宅からビニール袋やポリタンクで大量の水を運んでくれた。」(AO)「食器を洗う水が確保できない間は、皿にサランラップを敷いて使用し、サランラップのみを捨てる。」(AO)「非常用の飲料水と食料は、少なくとも2～3日分は必要だ。」(AO)

□ 被災地での移動手段 → バイク、自転車
「被災地をバイクで、見て回りました。」(SU)「明るくなると同時に須磨から長田まで自転車で見に行きました。」(YH)

「語り部通信」では皆様のご意見を募集しています。いただいた意見は紙面でも紹介していきたいです。また、以前お送りさせていただいたアンケートもあわせてお送り下さい。現在16人の方の支援で運営しています。

「語り部通信」編集協力：内田和義（通産省） 河島歩（ダイナックス）
連絡先： Fax: 03-5706-7204 Nifty ID #: BYA01045

D Y N A X

SAS神戸「神戸大震災の記録」プロジェクト
～ 語り部通信② 「その時、必要な情報」 ～

震災では、まず電気が止まります。するとテレビが使えません。毎日、当たり前のように入ってきた情報がぶつんと切れてしまいます。こうなると、情報は口コミか、ラジオしかありません。どのような情報が必要なのか、どのようにしか情報は伝わらないのか、語り部通信第2回目のテーマです。

□ 情報の入手方法 → 口コミが重要

「電気がダメだったから情報は口込みかラジオしかありませんでした。今のシステムはやはりテレビ中心です」「大変役に立ったのは小さな公園があったことです。そこで初めて（近所の）情報交換ができるわけです」「避難せずに、何とかもったから家にいる人には情報伝達が一番遅れました」

□ 必要な情報 → 被災者への地域での情報、避難所への情報

「「ここで炊き出しがあるから」とか「こんなもの配っているから」とか「こういう相談はどこに行ったらいいか」とか、とにかく情報が全然入ってこなかった」「仮設住宅の申込みをどうしたらいいか、どこに行ったら義援金が受けられるか、被害者に対するケアはどこで受けられるか等、サービスの問題が十分に伝わるようになるには、やはり一月以上かかりました」

□ マスコミや行政 → 機能しないことを想定する

「地震の規模や状況については最後まで、日本の報道は後手を踏んでいました。政府自体がこうした報道に頼っていたようですから、初期活動や体制が遅れるのも無理もないと思いました」「被災者から役所に電話がやたらとかかってきましたが、僕ら自身、どこでどういう情報があってどうしているのかわかりませんでした。行政内部の情報伝達が大きな課題です」「行政も、消防も、警察も機能しない状況を想定しておく必要があります」

□ 半壊、全壊の判断 → 役所がやってはダメ

「半壊なら潰し賃がただになるからという話が多かった。こういった判断は、外部の第三者機関が組織立てて一気にやった方がよい。しかも、地元ではなく、外部からやってきて、判断をしたらさっと引き上げられる人でないとダメです」

「語り部通信」では皆様のご意見を募集しています。いただいた意見は紙面でも紹介していきたいです。また、以前お送りさせていただいたアンケートもあわせてお送り下さい。現在16人の方の支援で運営しています。

「語り部通信」編集協力：内田和義（通産省） 河島歩（ダイナックス）
連絡先： Fax :03-5706-7204 Nifty ID # :BYA01045

D Y N A X

「SAS神戸・阪神大震災の記録」プロジェクト
～ 語り部通信 ③「救出活動の記録」 ～

今回はSAS神戸の表具さんからお借りした、神戸市消防局広報誌「雪」の特集号から震災時の救出活動の実情をお伝えします。

□「プールや川を堰とめ、あるいは運河へとポンプは水を求めた。消防艇からは、六線ものホースが延々と2キロもの路上を這った。続々と投入されてくる全国各地からの応援消防隊が、その間に入って中継した。」

□「生き埋めの4名がいると思われる2階部分には3、4階が非情にも重くのしかかっていた。「もしかしたら…」そんな僅かな希望を胸に救出作業を開始、その時、我々が見たものは、冷たく変わり果てた大人と子供の遺体だった。2人は見るからに重そうな鉄骨の下で、大きな体が小さな体を庇うように横たわっていた。各隊員は交わす言葉もなく、瓦礫の撤去作業を進めた。収容された遺体が家族に引き渡され、最期の一人となった8歳の子供が収容されたとき、父親らしい男性の目から耐えていた涙が一気に溢れ出ていた。「苦しい早く助けて下さい！」と5、6メートル奥から苦痛の声「すぐ助けるから、しっかりしろ！」やっとの思いで要救助者の所まで辿りついた瞬間「ドドドー」震度4、5の余震。後ろ向きのまま、這って逃げようとしたが身動きがとれず、この時ばかりは、死を覚悟した。」

□「ようやく救出できたが、その顔はやつれ、一人では立ってられない状態であった。「ありがとうございます。妻は救出できますか」と隊員2名に抱き抱えられながら堰を切ったように尋ねてきた。隊員から重機が必要との説明を聞き、無言で倒壊した建物に向きなおし、手を合わせる姿に「お母さん、すまん」というお父さんの嗚咽が部屋に響いた。」

□今回の災害では市民から「スコップを貸してくれ」「バールは無いかな」「ジャッキが必要だ」との声が多かった。多くの市民が家屋の下敷きになった人を自分たちで救助しようとしたが道具がなかった。従来の水防倉庫と同様のものを市内各所に置き、災害時に自由に使用し出来れば。

□「そうだ音がない！声がないのである。人々は燃え盛る火を、あるいは下敷きになった現場を指で指し示し、ただ啞然としている。歩道を行く人々は一様に毛布を被り、うつむいてただ黙々と避難しているのである。道路を埋めた自動車はクラクションを鳴らすでもなく、異常に響くのは火勢を増す火の音だけであった。」

皆様にはお変わりありませんでしょうか？今回はボランティア・プロジェクトで行っています「語り部通信」を送らせていただきました。（竹川）

現在16人の方の支援で運営しています。

「語り部通信」編集協力：内田和義（通産省） 河島歩（ダイナックス）
連絡先： Tel:03-5706-7201 Nifty ID # :BYA01045

D Y N A X

「SAS神戸・阪神大震災の記録」プロジェクト
～ 語り部通信 ④「被災地生活の実態」 ～

被災生活はまさに地獄のようでした。
「被災地生活の実態」が語り部通信第4回目のテーマです。

□ 怖いのは火事 → 震災の後から遅れて発生する

「逃げる時に怖いのはやはり火でした。もう四方から火が迫ってくる中で、みんな避難所に逃げ込んでいました」「私達の所では2時間位してから火が来たんです。遅いところでは4～5時間後に火が来たところもあります。」「三日後、四日後なんかは漏電で火が出ています。」「石油ストーブは倒れていないはずなのに、その上に瓦礫なんか積もって、少しずつ発火した例もあるみたいです」

□ 水や食料 → 生活用水は沢山必要。食料は一週間で大丈夫

「飲み水は確保できても、生活用水が沢山いることを知り、改めて水の大切さを実感しました」「避難家族の急増で確保が必要となり、買い出しに行きました。市場の雰囲気から見て、一週間辛抱すれば、食料はほとんど不自由なく入手できると感じました」

□ 遺体安置場所 → 学校等。でも、避難所と共同

「遺体安置所は学校にする話がついていたので、そこへ行ってシートを引きました。午後になると、戸板に乘せたり、手押し車を2台横に連ねてその上に乗せたりして、次々と遺体が運び込まれ、体育館はもう一杯になりました」「棺桶も組立式の物が搬入されたので、我々が組み立て、この中に遺体を安置しました。」「遺体で腐りやすい所は脳と内蔵なので、ドライアイスは顔の横とお腹の上に入れます。そこだけ毛布をめくればよく、遺体の全体は見なくてもいいので、それだけは救われました」「体育館が避難所兼遺体安置所になっていて、避難している人の横に遺体を置いて、みんな2～3日一緒という状態でした」

□ 遺体の処理に追われる → 生存している要保護者まで手が回らない

「遺体の処理は家族の方も殺気立っていますので、結局そちらに手を取られ、生存されている要保護の方、お年寄りや障害者の実体は全く把握できず、2週間ほどは全く放置されている状態でした」

「語り部通信」もいよいよ4回目になりました。次回は「ボランティアについて」です。以前お送りさせていただいたアンケートの回答をよろしくお願いいたします。現在16人の方の支援で運営しています。

「語り部通信」編集協力：内田和義（通産省） 河島歩（ダイナックス）
連絡先： Tel :03-5706-7201 Nifty ID # :BYA01045

D Y N A X

「SAS神戸・阪神大震災の記録」プロジェクト
～ 語り部通信 ⑤「ボランティアについて」 ～

今回はヒアリングの中で話があった、ボランティア活動についてです。皆さんボランティア活動について様々な感想をもたれています。

□震災中での民間の役割、ボランティアや個人の役割をうまく整理しておく必要があると思います。消防とか警察がすぐ機能できたらいいんだけど、機能できない場合は住民がやれるように、一番最初の役割と、一週間ぐらいたってからの役割を整理しておく必要があります。

(Hさん)

□今回のような大震災の場合、物資を必要な所へタイミングよく配分することはいかに大変であるか、間接的ですが理解できたと思います。

(Yさん)

□「あきんどの会」に連絡を取り、握り飯800個を用意してもらいました。次にフリーマーケットをやっているTさんに連絡し、夕方4時頃には神戸方面に走ってもらいました。とにかく小さな避難所に届けてもらいました。自分の役割はその程度だと思いました。

(Uさん)

□結果としてどこがケアしてくれたかという、西神戸YMCAという団体がやってくれました。多分行政は避難所などの目の届くところにはいっているだろうと言うことで、目の届かないであろう在宅の要保護の所に自分たちは行こう、ということで民間のボランティア団体などが在宅をケアしてくれました。そのことによって辛うじて救われた部分があると思います。(Sさん)

□確かにボランティアの人は本当によくやってくれて、これは本当に感謝しなくてはならないんだけど、ボランティアは引き時が大切なんですね。兵庫県は、ボランティアを抱える気らしいけど、僕は絶対それを進める気はない。ボランティアはその活動が一律でないところが利点でもあるんですが、行政としてその原理を長く続ける訳にはいかないんです。(Oさん)

今回で語り部通信も5回を迎えました。次回で最終回です。次回のテーマは内田さんによる「今後の神戸のあり方について」です。お楽しみに！

現在16人の方の支援で運営しています。

「語り部通信」編集協力：内田和義（通産省） 河島歩（ダイナックス）
連絡先： Tel:03-5706-7201 Nifty ID#:BYA01045

D Y N A X

語り部通信⑥ 今後の神戸のあり方

震災に遭われた方は、住民としての自分は、地域は、行政は．．と真剣に考え込みます。その中から、今後の神戸のあり方が語り部通信第6回目のテーマです。

□今後の震災対策 → 最悪の場合を想定した対策

「行政、住民、民間それぞれが緊急事態における役割分担を考えておかないといけません」「仮設住宅を建てる場所を考えておき、水の備蓄も必要です。避難所の用地や仮設住宅を国や県や市のどこの誰が作るかを決めておく必要があります」

□今回の災害は都市災害 → インナーシティ対策が必要

「山を削って造った団地や海を埋め立てた所は大丈夫でした。しかし、都市の中心部は災害が大きく出ました。都市計画道路を造ってきれいな街区にするチャンスでしょう」「今回の震災は高齢化率が高いインナーシティが被害を受けました。自立できる人がいるのに、福祉と言いながら、なにも支援できませんでした」「街づくりでも、口先だけ年寄りや住民に優しくと言いながら、結局は私たちを排除してしまう．．という住民からの批判があります」

□街の再生とは → 元に戻すだけではない、新しい街づくりを

「私の町内でも従来から様々な問題がありましたが、今回さらに多くの問題が発生しました。町内会として新しい街のコミュニティをどう形成するかから考える必要があります」「ニュータウンのように若く、複数世代の居住が困難な地域では、防災や福祉面での支援等、今回を機会に考えること多いのでは」

□これからの街づくりは → ハードとソフトの両方を

「行政と街づくり協議会とでうまく話が進める体制ができたのは2つポイントがあります。一つは震災後一月ほどで地域の合同葬儀が行われたこと、もう一つは普段から子供の御神輿とか、カラオケ大会とか、そういう普段のつながりがあって、あらかじめ地域のコミュニティができていたことです」「これからは、ハードの街づくりもそうですが、ソフト面でのコミュニティづくりは大事です」

本フォーラムの実施にあたり、
阪神・淡路コミュニティ基金及
び(財)関西エネルギー・リサイ
クル科学研究振興財団より助成
を受けました。

SAS神戸 震災2周年フォーラム組織委員会

上 谷 重 男

大 塚 明

黒 木 直 人

多 田 裕 子

友 久 和 幸

組織委員会代表 日 野 孝 雄

表 具 喜 治

湯 原 正 樹

SAS神戸代表幹事 横 田 朝 行

吉 田 昭 彦

神戸市中央区海岸通6番(旧居留地)建隆ビルⅡ 4階
神戸法律事務所内 SAS神戸事務局

発行：1997年9月

本件についてのお問い合わせ等は、下記にお願いいたします。

SAS神戸 代表幹事 横田朝行

尼崎市塚口町3-37-12 Tel.06-421-5896

SAS神戸 事務局 大塚明

神戸市中央区海岸通6 建隆ビル2 神戸法律事務所内

Tel.078-332-3251

システムズ・アナリスト・ソサエティ（SAS）について

SASは当時通産省電子政策課長をしていた平松守彦氏（現大分県知事）を中心とする情報化を推進し、情報化社会の到来を予見していた人々によって1971年に設立されました。現在北海道、東北、東京、横浜、名古屋、京都、関西（大阪）、神戸、但馬、和歌山、熊野（新宮）、広島、九州の13の地域に設立されており、会員数1007名を擁しています。

私たちは現代社会の問題や地域の課題、未来社会の展開についてプロジェクトを組織し、多くの英知を集め研究と提言に取り組んでいます。皆様もご存知のメンバーとしては平松守彦大分県知事、小笠原暁元兵庫県副知事、月尾嘉男東京大学教授、大原謙一郎中国銀行副頭取等の方々もおられます。このように政府各省、地方自治体、金融機関、シンクタンク、建築家、デザイナー、情報処理関係者等の人たちを含む職域、地域を超えた全国的なネットワークを形成しているのがSASの特徴です。

本報告書を作成するにあたり、私たちの趣旨をご理解頂くため、1971年創立いたしました当時作られました、創立宣言文を掲載させていただきます。

システムズ・アナリスト・ソサエティ創立宣言

われわれは、いま、かつて歴史が経験したことのない激動の時代に生きている。今世紀に生み出された数多くの新しい技術によって、経済、社会全般にわたって大きな変革が展開され、われわれが祖先から受け継いできた伝統的な思考方法や行動基準だけでは解決しえない幾多の問題が出現し、その勢いは、今後ますます増大する動きをみせている。

われわれは、この困難な時代を、英知とエネルギッシュな実践力によって切り開くための真摯な努力を開始し、ここに「システムズ・アナリスト・ソサエティ」を設立した。

われわれの使命は、かかる実践基準に立ち、創造的なプロジェクトの開発に取り組むことである。「われわれになにができるか」を討論するかわりに「われわれはなにをすべきか」を究明することを目的とし、その結果を社会に提起することによって、未来への限りない前進を続けることを宣言する。

昭和46年10月4日

